

# 散柳窓夕栄

永井荷風

青空文庫



てんぼう 天保十三壬寅の年の六月も半を過ぎた。いつもならば江戸御府内を湧立ち返らせる山王大権現の御祭礼さえ今年は諸事御儉約の御触おふれによつてまるで火の消えたように淋さびしく済んでしまふと、それなり世間は一入ひとしおひつそり盛夏の炎暑に静まり返つた或日の暮近くである。『修紫田舎源氏』の版元通油あるちよう町の地本問屋鶴屋の主人喜右衛門は先ほどから汐留の河岸しおどめ通かに行燈あんどうを掛かけならべた唯とある船宿ふなやどの二階に柳下亭種員りゆうかていたねかずと名乗つた種彦たねひこ門下の若い戯作者げさくしやと二人ぎり、互たがいに顔を見合

わせたまま団扇うちわも使わず幾度いくたびとなく同じような事のみ繰返くりかえしていた。

「種員さん、もうやがて六ツむだろうが先生はどうなされた事だろうの。」

「別に仔細しさいはなからうとは思いますがそう申せば大分お帰りがお遅いようだ。事によつたらお屋敷で御酒ごしゆでも召上つてるのでは御ございますまいか。」

「何さまこれア大きにそうかも知れぬ。先生と遠山様とみやまさまとは堺さかいちよう町ちようあたりではその昔随分御昵懇ごじつこんであつたとかいう事だから、

その時分じぶんのお話はなしにいろいろ花が咲いているのかも知れませぬ。」

「遠山様とみやまという方かたは思えば不思議な御出世ごしゅっせをなすつたものさね。」

ついでこの間までは人のいやがる遊あそびにん人とまで身を持崩もちくずしていなすつたのが暫しばらくの中うちに御本丸ごほんまるの御勘定方ごかんじようがたにおなりなさるなんて、これまで御番衆ごばんしゆうの方々かたがたからいくらも出世をなすつた方はあるうけれど遠山様のような話はありませんまい。」

「どうかまア遠山さまの御威光で先生の御身の上に別条のないようにしたいもんさ。万一の事でもあるうものなら、手前なんぞは先生とはちがつて虫けら同然すちようにんゆえの素町人故、事によつたら遠島えんとうかまず軽かろいところで欠所けつしよは免まぬかれまい。」

「もし鶴屋さん、縁起えんぎでもねえ。そんな薄気味の悪い話はきつい禁句だ。そんな事をいいなされると何だかいても立つてもいられないような気がします。ぼんやりここで気ばかり揉もんでいても始ま

らぬから私はその辺<sup>へん</sup>までちよつと一ツ<sup>ひとつ</sup>走り御様子を見て参<sup>まい</sup>りましよう。」

種員<sup>さんとも</sup>は棧<sup>ひと</sup>留<sup>さげ</sup>の一つ提<sup>ひと</sup>を腰<sup>さげ</sup>に下<sup>ひと</sup>げて席<sup>ぼし</sup>を立<sup>ひと</sup>ちかけたが、その時女中に案内<sup>あが</sup>されて梯子<sup>はしご</sup>段<sup>だん</sup>を上<sup>あが</sup>つて来<sup>あが</sup>たのは、何<sup>どこ</sup>処<sup>こ</sup>ぞ問屋<sup>もんや</sup>の旦那衆<sup>だんなしゆ</sup>かとも思<sup>おも</sup>われるよう<sup>よう</sup>な品<sup>ひん</sup>の好<sup>この</sup>い四十<sup>しじゅう</sup>あまりの男<sup>おとこ</sup>であつた。越<sup>え</sup>後<sup>ご</sup>上<sup>じょう</sup>布<sup>ふ</sup>の帷<sup>かた</sup>子<sup>びら</sup>の上<sup>うへ</sup>に重<sup>おも</sup>ねた紗<sup>しゃ</sup>の羽<sup>は</sup>織<sup>おり</sup>にま<sup>ま</sup>で草<sup>そう</sup>書<sup>しよ</sup>に崩<sup>くず</sup>した年の字<sup>じ</sup>をば丸<sup>まる</sup>く宝<sup>ほう</sup>珠<sup>じゆ</sup>の玉<sup>たま</sup>のよう<sup>よう</sup>にし<sup>し</sup>た紋<sup>もん</sup>をつ<sup>つ</sup>けてい<sup>い</sup>るので言<sup>い</sup>わずと歌<sup>うた</sup>川<sup>がわ</sup>派<sup>は</sup>の浮<sup>う</sup>世<sup>せ</sup>絵<sup>え</sup>師<sup>し</sup> 五<sup>ご</sup>渡<sup>と</sup>亭<sup>てい</sup>国<sup>くに</sup>貞<sup>さだ</sup> とは知<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>れた。鶴<sup>つる</sup>屋<sup>や</sup>はび<sup>び</sup>つくりして、

「これはこれ<sup>かめいど</sup>は亀井戸<sup>かめいど</sup>の師匠<sup>しせう</sup>。どうして手前<sup>てまへ</sup>共<sup>ども</sup>がこ<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>い<sup>い</sup>るのを御存<sup>ごぞん</sup>じで御<sup>ご</sup>ざ<sup>ざ</sup>りました。」

「実は今日さる処まで暑中見舞に出掛けたところ途中でお店の若わかいしゅう衆あに行き逢あい堀田原ほったわらの先生が日蔭町ひかげちょうのお屋敷へしかじかとのお話を聞き、私わしも早速先生の御返事が聞きたさに急いでやって来ましたのさ。時に先生はまだ遠山様のお屋敷からはお帰りがないと見えますな。」

国貞は歩いて来た暑しきりさに頻うちわと団扇を使い初める。立ちかけた種員は再び腰なる煙草たばこいれ入いれを取出しながら、「五渡亭先生も御存じで御座いましょう。手前あいでしと相弟子あの彼あの笠亭りゆうていせんか仙果せんかがお供を致しまして御屋敷へ上っておりますから、私は今の中うちひとはし一走り御様子を見て参ろうかと思つていた処で御座ります。もう追付おっつけお帰りとは存じますが何となく気がかりでなりませぬ。」

「いかにも不斷ふだんから師匠思しいのお前さん故こさぞ御心配ごしんぱいの事ことだろうと重じゆうじゆう々じゆうお察しし申まします。私わしなぞは申まさば柳亭翁りゆうていおうとは一身いっしん同体どうたい。今日けふ此このころ頃ころでは五渡亭国貞ごわたいていこくさだといえは世間よこへも少しは顔かほの売うれた浮世うきよ絵師えし。それというも実まことを申ませば『田舎源氏いんかげんじ』の絵ゑをかき出してからの事ことゆえ、万よろずが一ひとお咎とがめの筋すぢでもあるようなら私わしは所詮しよせん逃にげれぬ処ところだと、とうから覚悟かくごはきめていますが、お互たがにどうかまアそんな事ことにはなりたくないもの。」と国貞こくさだは声こゑを沈しずまして、忘れもせぬ文化三年ぶんわさんねんの春はるの頃ころ、その師歌うたがわとよくに川がわ豊とよ国くにが『絵本えほん太閤たいこう記き』の挿絵さしゑの事ことよりして喜多川歌麿きたがわうたまろと同じく入牢じゆうろうに及およぼうとした当時の恐おそしいはなしをし出した。すると鶴屋つるやの主人あるじもついついその話わにつり込まれて六、七年前むいっしちねんに大酒たいしゆで身みを損そこねた先代せんだいの親爺おやじ



から度々聞かされた話だといつて、これは寛政御改革のみぎり  
 さんとうあんきようでん  
 山東庵京伝が黄表紙御法度の御触を破つたため五十日の手  
 ぐさり  
 鎖、版元蔦屋は身代半減という憂目を見た事なぞ、やがて  
 はなし  
 談話はそれからそれへと移つて遂には英一蝶が八丈島  
 へ流された元禄の昔にまで溯つてしまつたが、これは五渡亭国貞  
 が先頃から英一蝶に私淑してその号まで香蝶楼と呼んでい  
 たがためであつた。折から耳元近く轟々と響きだす増上寺の  
 鐘の声。門人種員はいよいよ種彦の様子を見に行こうと立上り大  
 分山の痛んでいるらしい帯の結目を後手に引締めながら簾を  
 おろ  
 下した二階の欄干から先ず外を眺めた。日の長い盛りの六月の  
 事とて空はまだ昼間のままに明るく青々と晴渡つていた。いつも

ならば向河岸むこうがしの屋根を越して森田座もりたぎの幟のぼりが見えるのであるが、  
 時節がらとて船宿の棧橋さんばしには屋根船空しく繋がれ芝居茶屋の二  
 階には三味線さみせんの音ねも絶えて彼方かなたなる御浜御殿おはまごてんの森に群れ騒からすぐ鳥の  
 声こゑが耳立つばかりである。夕日は丁度汐留橋しおどめばしの半なかばほどから堀割  
 を越して中津侯なかつこうのお長屋の壁一面に烈はげしく照り渡つていたが、  
 しかし夕方の涼風は見えざる海の方から、狭い堀割へと渦巻くよ  
 うに差込んで来る上汐あげしおの流れに乗じて、或時は道の砂をも吹上  
 げはせぬかと思うほどつよく欄干の簾うごかを動し始める。

国貞と鶴屋あるじの主人は共々に風通しのいいこの欄干の方へとその  
 席を移しかけた時、外を見ていた種員とびあがが突然飛上とびあがつて、「皆さ  
 ん、先生がお帰りで御座ります。」

「なに先生がお帰り。」

いう間もおそし、一同はわれ遅れじと梯子段を駈け下りて店先  
 まで走り出ると、差翳す半開きの扇子に夕日をよけつつ静に  
 船宿の店障子へと歩み寄る一人の侍。これぞ当時流行の草双紙  
 『田舎源氏』の作者として誰知らぬものなき柳亭種彦翁で  
 あつた。細身造りの大小、羽織袴の盛装に、意気な何時もの着流  
 しよりもぐつと丈の高く見える瘦立の身体は危いまでに前の方  
 に屈まつていた。早や真白になつた鬢の毛と共に細面の長  
 い顔には傷しいまで深い皺がきざまれていたけれど、しかし日頃  
 の綺麗好に身じまいを怠らぬ皮膚の色はいかにも滑かにつやつ  
 やして、生来の美しい目鼻立の何処やらにはさすがに若い頃

の美貌びぼうのほども窺うかがい知られるのであつた。

種彦きさは今日きようしも老体の身に六月大暑だいしよの日中をもちとわず、予かね

てより御目おめど通りを願つて置いた芝日蔭町しばひかげちようなる遠山左衛門尉とやまさえものじよう

様さまの御屋敷へと人知れず罷り越したのである。仔細しさいというは外ほか

でもない。去頃さるころより御老中水野越前守様ごろうじゆうみずのえちぜんのかみさまかんせい寛政御改革かんせいの

御趣意をそのままに天下奢侈しやしの悪弊を矯きようせい正せいすべき有難おほしき思し

召めしにより遍あまねく江戸町々へ御触おふれがあつてから、已すでに葺屋町ふきやちよう堺さい

町ちようの両芝居は浅草山あさくさやまの宿の辺鄙しゆくへんびへとお取払いになり、また役

者いちかわえびぞう市川海老蔵は身分不相応の贅ぜいたく沢さわを極めたる廉かどによつてこの

春より御吟味ごぎんみになつた。それやこれやの事から世間では誰たれいうと

もなく好色こうしよくほん本草双紙類ほんそうしゆりの作者の中でもとりわけ『修紫田舎源しゆしやだんげげん

氏』の作者柳亭種彦はひかるげんじ光源氏の昔にたと譬えておそれおほ畏多くも大御所  
 様大奥の秘事を漏もらしたにより必ず厳しい御咎おとがめになるであろうと  
 の噂うわさすこぶかしまが頗る喧しいのであった。種彦はわが身の上は勿もちろん論もしや  
 そのために罪もない絵師や版元にまで禍わざわいを及ぼしてはと一ひとかた方な  
 らず心配して、こうなるからは誰かぞ公こうへん辺の知しりびと人を頼たのり内ない々  
 事情を聞くに如しくはないと兼かねて芝居町しばいまちなぞでは殊ことの外ほか懇意にし  
 た遠山金四郎とおやまきんしろうという旗本の放蕩児ほうとうじが、いつか家督をついで左  
 衛門尉景元えもんのかげもとと名乗り、今では御本丸へ出仕するような身分に  
 なっているのを幸い、是非にもとすがりつ縋ご付くいて極内ごくない々に面会を請  
 うた次第であつた。

「先生、早速で御座いますが御屋敷の御首尾はいかがで御座りま

した。」

一同は一ひとまず先種彦を二階へ案内するや否や、茶を持運ぶ女中の立去るをおそしと、左右から不安な顔を差伸さしのばすのであった。種彦は脇差を傍に扇を使いながら少し身をくつろがせ、

「いや、もうさして御心配なさるにも及ぶまい。遠山殿の仰せには町方まちかたの事とは少々御役向おやくむきが違ちがう故ゆえ、あの方かたの御一存ごいちぞんでは慥しかとした事は申されぬが、何につけお上かみにおいては御仁恵ごじんけいが第一。それにとりわけこの度たびの御趣意と申すは上下こごぞ挙つて諸事御儉約を心掛けいという思おぼしめし召故、それぞれ家業に精を出し贅ぜいたく沢なことさえ致さずば、さして厳ごせんぎしい御詮議にも及ぶまいとの仰おほせ。それだによつてこの際はお互によく気をつけ精々間違のないよう

に慎んでおるがよからう……。」「

「さようで御ざりましたか。それでは別に差当つて御叱おしかりを蒙こうむるような事はなからうと仰おっしゃ有るんで御座いますな。いや、先生、その御言葉を聞きましたして手前はもう生き返つたような心持になりました。」

版元鶴屋は襟えりもと元の汗をばそつと手拭てぬぐいで押拭うと、国貞も覚ええずほつと大きな吐息といきを漏して、

「手前も御同様、やつとこれで安堵あんど致しました。何事によらず根もない世上の噂というやつほどいまましいものは御座りません。初手しよてからこうと知つていればこんなに瘦やせるほど心配は致しません。」

「全く亀井戸の師匠の仰有る通りさ。手前なんざアそれがためあれからというものは夜もおちおち睡眠ふせりません。」と鶴屋の主人あるじは全く生返つたように元気づき、「先生、それではもうそろそろお船の方へお移りを願いましうか。お帰りは丁度夕涼ゆうすずみの刻限かと存じまして先ほど木挽町の酔月すいげつへつまらぬものを命じて置きました。」

「それはそれは。いつもながら鶴屋さんの御心遣おこころづかいには恐縮千萬。」

「お言葉ではかえつて痛み入ります。実はまだいろいろと御話を承りたいことが御座ります。丁度今日は亀井戸の師匠もおいでで御座りますし、さしずめ唯今板木はんぎに取りかかつております『田舎



源氏』の三十九篇、あれはいかが致したもので御座りませうか、  
いずれ船中で御ゆるり御相談致したいと存じております。」

一同は種彦を先にさんばし棧橋につないだ屋根船に乗込んだ。

## 二

背中一面に一人は菊慈童きくじどう、一人は般若はんにや若の面の刺青ほりものをした  
船頭ふなづかが纜もやいを解くと共にとんとひとつきさんばし一突棧橋へさきから舳へさきを突放すと、一  
同を乗せた屋根船は丁度今さかりが盛あげしおの上汐うしほに送られ、滑るがように  
心持よくさんじつけんぼり三十間堀さんじつけんぼりの堀割をつたわって、夕風の空高く竹問屋  
の青竹そばだの聳立たけがしつてまっすぐいる竹河岸はつちようぼりを左手に眺め真直な八丁堀の

川筋かわすじをば永代えいたいさして進んで行つた。

夏すでの日は已に沈んで、空一面の夕焼は堀割の両岸りょうがんに立並ん

だ土蔵の白壁をも一樣に薄赤く染めなしていると、その倒さかさなる家

の影は更に美しく満潮の澄渡すみわたつた川水の中に漂い動いている。

幾個いくつと知れぬ町中まちなかの橋々には夕涼ゆうすずみの人の団扇うちわと共に浴衣ゆかた一

枚の軽い女の裾すそが、上汐のために殊更ことさら水面の高くなつた橋の下

を潜くぐり行く舟の中から見上る時、一入ひとり心憎く川風ひるがえに翻ひるがえつてい

のである。

一同は種彦たねひこの語つた最前の話に百年の憂苦を一朝いちちようにして

忘れ得た思すいい。酔月すいげつから取寄せた料理の重じゆうづめ詰めを開き川水に

杯さかずきを洗すすいながら、頻しきりに絶景々と叫んでいたが、肝腎かんじんな種彦一

人は大暑だいしよの日中を歩みつづけた老体につかれを覺えた故ゆえか、何  
 となく言葉少く、片肱かたひじを舷ふなべりに背を胴どうの間の横木まに寄せかけたま  
 ま、簾すだれ越こしに唯ただぼんやり遠い川筋の景色にのみ目を移していた。  
 しかし船中の一人がふと種彦の様子を怪しんで、何処どこぞ御氣分  
 でもと氣を揉もむものがあれば、種彦たちまは忽ちわざとらしいまでに元  
 氣よく、杯を見事に吞干のみほして、「いや、どうも年ばかりは取りた  
 くないものさ。少し遠路とおみちでもいたすと直すぐにこの通りの始末で  
 御座る。」といつもに変わらぬ軽い調子で、「しかしまあわれらお  
 互たがいの身みに取たいつて今日ほど目出たい日はあるまいて。鶴屋さんが折  
 角もてなしのお饗もてなし応おこだ。種員たねかずも仙果せんかも遠慮なく頂ちようだい戴たい致いたすがよいぞ  
 。」といいいながら、しかしどういいう訳わけか一同の如く心の底から陶

然と酔えいを催す様子は更に見えなかつた。

種彦は先刻から遠山左衛門尉とおやまさえもんが事をばいかほど思うまいと

力つとめて見てもどうしても思返さずにはいられなかつたのである。

顧れば十幾年前芝居町まえしばいまちなぞで能く見た折の金四郎と今日こんにちの左衛

門尉もんゑうを思い比べると実に不思議な心持になる。遠山は辞を低う

してその邸やしきに伺候しこうした種彦をば喜び迎え、昔に交らぬ剩じょうだん談だんば

なしの中にそれとつかず泰平の世は既に過ぎ恐しい黒船くろふねは蝦夷えぞ松

前つまえあたりを騒がしている折から、世は上下とも積年の余弊に苦

しみつかれている様を見ては、われ人ひと共に公禄こうろくを食はむもの及ば

ずながらそれぞれひとかど一廉いつけんの忠義ちゅうぎを尽つくさねばなるまいと、衷ちゅうしん心しん

から湧起わきおこる武士さむらいの赤誠せきせいを仄見ほのみせて語つたその態度その風采ふうさい。

種彦はどういう機会はずみかわが身の今日こんにちと彼れ遠山の今日とを思比べて、当世の旗本風情ふぜいにもまだまだあんな立派な考えを持つているものがあるのか知らと思うと、そもそも我から意識して戯作者げさくしやとなりすました現在の身の上がいかに不安にまた何とも知れず気恥しいような気がしてならなくなつた。しかしいかほど深い感慨に沈められても種彦は今更それをば船せんちゆう中ちゆうのものに向つて語り聞かせる訳わけには行かぬ。よし話すにしてもこの場合思うように打明けて語り得られるものではない。さされた酒杯さかずきをばさされるままに呑み干しては返し、話掛けられる話を、心もよそに唯受ただ答えをするばかり。船はいつしか狭い堀割の間から御船手屋敷おふなでやしきの石垣下を廻めぐつてひろびろとした佃つくだの河口かわぐちへ出た。

一同は既に十分の酔心地えいごころ。覚えず声こゑを揃そろえてまたもや絶景々々と叫ぶ。夕焼の空は次第に薄らぎ鉄砲洲てつぱうずの岸きし辺べに碇いかりを下した親船の林なす帆柱の上にはちらちらと星が泛うかび出した。佃島つくだじまでは例年の通り狼烟のろしの稽古けいこの始まる頃とて、夕涼かたがたそれをば見物に出掛ける屋根船猪牙舟ちよきぶねは秋の木葉の散る如く河かわ面もに漂うつていと、夕風と夕汐のこの刻限を計せんつて千石積せんごくづみの大船はまた幾艘いくそうとなく沖の方から波を蹴けつてこの港口へと進んで来る。その大きな高い白帆のかげに折々眺望を遮さえぎられる深川ふかがわの岸きし辺べには、思切きりめつて海の方へ突出つきたして建てた大新地小新地の楼閣に早くも燦きらめき初そめる燈火ともしびの光と湧起げんかる絃歌げんかの聲。すると櫛くしの齒はのように並ならびつらな連つらなつたそれらの棧橋さんばしへと二艇にちようろ艦いそがしく輻湊ふくそう

する屋根船猪牙舟からは風の工合で、どうかすると手に取るように藤八拳とうはちけんを打つ声が聞えて来る。

国貞は近頃一枚絵にと描いてやった深川の美女が噂うわさをしはじめると鶴屋の主人あるじはまた彼の地かを材料にした為ため永春水ながしゆんすいが近作の売行うれゆきを評判する。その間まもあらず一同を載せた屋根船は殊更に流れの強い河口の潮うしおに送られて、夕靄ゆうもやの中うちよこたわえいたいに横る永代橋いざよひばしを潜くぐるが早いみつまたか、三股たかおいなは高尾稻荷の鳥居かなたを彼方あかつきに見捨て、あかつきがた 暁方あかつきがたの雲の帯ほとなくかなかずの時とき鳥とと、蜀山人しよくさんじんが吟咏ぎんえいのめりやすにそぞろ天明てんめいの昔むかしをしのばせる仮宅かりたくの繁昌はんじやうも、今は唯ただ蘆あしのみ茂さかる中洲なかつを過ぎ、気味悪く人を呼ぶ船饅頭ふなまんじゆうの声をねぐら 疇な定めぬ水禽みづとりの鳴音なくねかと怪しみつつ新大橋しんおおはしをも後あとにすると、

さて一同の目の前には天下の浮世絵師が幾人よつて幾度丹青を凝しても到底描き尽されぬ 両国橋の夜の景色が現われ出るのであつた。

去年に比べると今年は御儉約の御触が出てから間もないためか、  
 川一丸とか吉野丸とかいう提灯を下げ連ねた大きな大き

な屋形船に美女と美酒とを満載して、吹けよ河風上れよ簾の三

下りに呑めや唄えの豪遊を競うものは稀であつたが、その代り

小舷に縺子の空解も締めぬが無理かと簾下した低唱浅酌

の小舟はかえつていつにも増して多いように思われた。両国橋の

橋間は勿論料理屋の立並ぶあたり一帯の河面はさすがの大

も込合う舟に蔽尽され、流るる水は舷から玉臂を伸べて杯



を洗う美人の酒に湧いて同じく酒となるかと疑われる。

鶴屋の主人は「先生。」とよびかけて、「いつ見ましても御府ごふ

内の御繁昌は豪勢なもので御座いますな。いかがで御座いましよない

う。どこぞその辺の棧橋へ着けまして二、三人綺麗きれいなところを呼

寄せ久ぶりで先生の美音を拝聴いたしたいもので御座ります。」

「これはとんでもない。こう年を取つては色気いろけよりも喰気くいけと申し

たいが、この頃ではその喰気くわいけさえとんと衰え、いやはや、もうお

話にはなりません。折角の御酒ごしゆも御覧の通り二、三杯いただく

唯うとうとと眠気を催すばかりさ。さすが蜀山しよくさん先生せんせいはうまい

事を書いていきますよ。先達せんだつてさる人から『奴師やつこ勞之』と申す随

筆を借りて見ましたがな……。』と種彦は先ほどから舷ふなばたに肱ひじをつ

き船のゆれるがままに全く居眠りでもしていたらしく、やや坐い住ず  
 居まを直して、今更のように四辺あたりの賑にぎわいを打見遣りながら、どうか  
 すると、摺すれ交ちがう舟の唄または岸の上なる見世物小屋の騒ぎにも  
 打消されるほどな静しずかな声で、蜀山人が随筆『奴師勞之』の終りに、  
 老病ほど見たくでもなくいまいましきものはなし……酒のみても  
 腹ふくるるのみにて微醺びくんに至らず物事にうみ退屈し面白からず。  
 声せい色しよくの楽みもなくただ寝るをもて楽みとす。奇書も見るにた  
 らず珍事もきくにあきぬ。若き時酒のみてとろとろ眠りし心地と  
 狎なれたる妓おんなのもとに通いし楽たのしみは世をへだてたるごとくなりきと書  
 いた文章の事をしみじみと語り出して、その終に添えた狂歌一首、  
 「ながらへば寅卯辰巳とらうたつみやしのばれん、うしとみし年今はこひしき

。「それをばあたかも我が身の上を咏じたもののように幾度かくりかえ繰返して聞かせるのであつた。屋根船はその間にいつか両国の賑にぎわひを漕ぎ過ぎて川面かわもせのやや薄暗い御蔵おくらの水門外すいもんそとに差掛さしかかつていたのである。燈火の光に代つて蒼々あおあおとした夏の夜の空には半輪はんりんの月。行手ゆくての岸には墨絵の如くにじんだ首尾しゆびの松。国貞は猪口よくを手にしたまま、

「唐崎からさきの松は花よりおぼろにて。」と感に堪つかえたる如く呟つぶやいた。

「御府内ごふないには随分名高い松の木があるようで御座いますすがやはりの首尾しゆびの松に留とどめを刺つしますかな。」と答えたのは鶴屋喜右衛門つるやきうえもんである。

「さよう、小名木川おなぎがわの五本松は芭蕉翁ばしやうおうが川上とこの川しもや月

の友、と吟じられたほどの絶景ゆえ先まず兄けいたりがたく弟ていたりがた  
 き名めい木ぼくでしよう。それから根岸ねぎしの御行おぎようの松、亀井戸かめいどの御腰おこしか  
 掛けの松、麻布あさふには一本松、八景坂はつけいざかにも鎧よろい掛かけの松とか申す  
 のがありました。「と国貞は鶴屋の主人あるじと差向さしむかつて頻しきりに杯を取と  
 りかわ  
 交まじわつていた時、行き交ちがう一いっ艘そうの屋根船やねぶねの中から、  
 「月あかり見ればおぼろの舟の内うち、あだな二上にあがり爪弾つまびきに忍おび逢あ  
 うたる首尾くびびの松。」と心こころ悪にくいばかり、目前まへの実景じつけいをそのまま  
 中音ちゆうおんの美声びせいに謡うたい過ぎるものがあつた。

先ほどから舳へへ出でて、やや呑み過えいごした酔よ心地ごちを得えてもいわれ  
 ぬ川風かみかぜに吹ふかされて二人ふたりの門人かどにん種たね員かずと仙果せんかは覚えおぼえず羨望せんぼう  
 の眼まなこを見張みつて、過まぎ行く舟ふねの奥床おくゆかしくも垂たれ込こめた簾すだの内うちをば

窺見うかがいみ ようと首を伸のびしたが、かの屋根船は早くも遠く川下の方  
 へと流れて行つてしまつた。しかしいよいよ首尾の松が水の上に  
 と長くその枝を伸のびしているあたりまで来ると、川面の薄暗さいわいさを幸  
 に彼方かなたにも此方こなたにも流れのままに漂ただよしてある屋根船の数々、その  
 間をば一同を載せた舟が小舷こべりに漣さざなみを立てつつ通とお抜りぬけて行く時、  
 中にはあわてふためいて障子の隙間すきまをば閉切しめるものさえあつた。  
 どの船からという事もなく幽暗はんげつなる半月の光に漂い聞ゆる男女  
 が私語ささやきの聲は、折々向河岸むこうがしなる椎しいの木屋敷の堀へい外そとから幽かすか  
 に夜駕籠よかごの掛声を吹送つて来る川風に得もいわれぬ匂におい袋ぶくろの香か  
 を伴ともわせ、また途切とぎれがちな爪弾つまびきの小唄こなたは見えざる河心かわなかの水底みなそこ  
 深くざぶりと打込む夜網の音に遮さえぎられると、嚴重な御蔵おくらの構内に

響き渡る夜廻りの拍子木が夏とはいいながら夜も早や初更しよこうに近い露の冷さに、何とも知れず人肌恋しき秋の夜の風情を覚えさせるのであった。

余りに艶なまめかしい辺りの情景に、若い門人たちは自ら誘い出される淫蕩いんとうな空想にもつかれ果てたのか、今は唯遣瀬やるせなげに腕を組んで首こうべを垂れてしまった。国貞が鶴屋の主人あるじを相手に傾ける酒も早や尽きたらしい。御厩河岸おうまやがしの渡を越して彼方かなたに横わる大川橋おおかわばしの橋間からは、遠い水みなかみ上に散乱する夜釣よづりの船の篝かがりび火さえ数えられるほどになると、並木の茶屋にぎわいの賑にぎわいと町を歩く新内しんないの流しが聞えて駒形堂こまかたどうの白い壁が月の光あおに蒼く見え出した。

一同は禁殺碑きんざつひの立っている御堂おどうの裏手から岸のぼに上った。

国貞こくには爰こゝから大川橋へ廻つて亀井戸かめいどの住居すまいまで駕籠かごを雇い、また鶴屋りようごくばしは両国橋りようごくばしまで船を漕こぎ戻して通油町とおりあぶらちようの店へ帰る

事にした。種彦は遠くもあらぬ堀田原ほったわらの住居まで、是非にもお

供せねばという門人たちの深切しんせつをも無理に断り、夜涼やりようの茶屋

々々にぎわ賑おどう並木おどの大通よこぎを横断よこぎつて、唯一人薄暗い町家まちやつづきの

小道みしまもんぜんをば三島門前ほうの方へとほとぼ老体あゆみの歩あゆみを運あゆみばせたのである。

種彦は先ほどから是非にも人を遠ざけ唯一人になつて深く己おのが

身の上を考えて見ねばならぬ。この年までいわば何の気もなく暮

して来たその長い生涯を回顧して見べき必要に迫<sup>せ</sup>められていたの  
であつた。昔は自分なぞよりはもう一層<sup>たち</sup>性の悪い無頼漢<sup>ならずもの</sup>のよう  
にも思つていた。遠山金四郎<sup>とおやまкинしろう</sup>が今は公儀の重い御役<sup>おやく</sup>を勤め真実世  
の有様を嘆き憂<sup>うれ</sup>いでいるかと思えば、種彦<sup>とここ</sup>は床の間に先祖の鎧<sup>よろい</sup>を  
飾つた遠山が書院に對座して話をしている間<sup>うち</sup>から何時<sup>いつ</sup>となく苦し  
いような切ないような氣恥しいような何ともいえない心持になつ  
たのである。一体<sup>おこり</sup>どうしてそういう妙な心持になつたのであろう。  
まずその原因<sup>おこり</sup>から考えて見なければならぬ。武士の家に生れた  
その身は子供の時から耳に聒<sup>たご</sup>胝<sup>こ</sup>のできるほどいい聞かされた武士  
の心得武士の道。しかしそんなものはこの歳<sup>としつき</sup>月唯「お輕勘<sup>かるかん</sup>平<sup>へい</sup>」  
のような狂言戯作<sup>げさく</sup>の筋<sup>すじ</sup>立<sup>だて</sup>にのみ必要なものとしていたのではな



いか。それが今どうして突然意外にも不思議にも心を騒がし始めたのであろう。思返えせば二十歳の頃ふと芝居帰の或夜野暮な屋敷の大小の重きを覚え、御奉公の束縛なき下民の気楽を羨みいつとしもなく身をその群に投じてここに早くも幾十年。今日しも遠山の屋敷の玄関に音ずれるその日までは夢にさえ見ること忘れたい武家の住居——寒気なほどにも質素に悲しきまでも淋しい中なかにいうにいわれぬ森しんげん 厳げん 氣を漲みなぎらした玄関先から座敷の有様またその道すがら横手遥はるかに幸さいわい 橋はし の見附みつけを眺めやつた御お 郭外くわくそとの偉大なる夕暮の光景が、突然の珍らしさにふと少年時代の良心の残骸ざんがいを呼覚よびさましたというより外ほかはあるまい。

しかし種彦は今更いまさらにどうとも仕様のないこの煩悶はんもんをば強い

ても狂歌や川柳のように茶化してしまおうと思ひながら、歩

いて行く町のところどころに床几を出した麦湯の姐さんたちの

厭らしい風俗。それに戯れる若者の様子を目撃しては、以前のよ

うにこれも彼の式亭三馬が筆のすさみのそのままだと笑つてば

かりはいられないような気になるのであった。我が家に近い桃

林寺の裏手では酒買いに行く小坊主の大胆に驚き、大岡殿の

塀外の暗さには夜鷹に挑む仲間間の群に思わずも眼を外向けつ

つ、種彦は漸くその家の門にたどりついた。

直様家内のものをも遠ざけ、書ものをするからとて、二階の

一間に閉じ籠つたが、見廻せば八畳の座敷狭しと置並べた本箱の

中の書籍は勿論、床の飾物から屏風の絵に至るまで、凡

て修にせむらさきろう紫し楼ろうと自ら題したこの住居すまいのありさまは、自分が生れた質素な下谷したや御徒町おかちまちの組屋敷くみやしきに比べてそも何といおうか。身に帯びるそれも極ごくく軽い細身ほそみの大小より外ほかには物の役に立つべき武器とては一ツもなく、日頃身に代えてもと秘蔵するのは古今の淫書いんしょ、稗史はいし、小説、過ぎし世の婦女子の玩具がんぐにあらざんば傾けいせ城遊女いゆうじよが手道具たぐいの類ばかり。ああ思えば唯うらうらと晴渡る春の日のような文化文政の泰平ちんめんに沈ちんめん湎めんして天下の事は更なり、わが髪かみの白くなるのも打忘れ世にいう悪所場あくしよばをわが家やの如く今日は吉原よしわら明日は芝居と身の上知らず遊あそび歩いていたその頃には、どういう訳わけか人の道を忘れた放蕩ほうとう惰弱だじやくなものものの厭いとわしい身の末すえが入相いりあいの鐘かねに散る花かとはばかり美しく思われて、われとても何

つ  
時か一度は無常の風にさそわれるものならば、今もなお箕輪みのわしんじ

心ゆう中と世に歌われる藤枝外記ふじえだげき、また歌比丘尼うたびくにと相對死あいたいじにの浮名

を流した某家の侍さむらいのように、せめて刹那せつなの麗うるわしい夢に身を果はたして

しまった方がと、折節おりふしに聞く浄瑠璃じようるりの一節ひとふしにも人事ひとごとなら

ぬ暗涙を催す事が度々であった。日ごとに剃そる月代さかゆきもまだその

頃には青々として美しく、すらりとして丈高せいく、長い頤おとがに癖がいのあ

る細ほそおもて面の優しさは、時の名優坂東三津五郎ばんどうみつごろうを生写いきうつしと到いた

処ところの茶屋々々にいい囃はやされるが何よりも嬉うれしく、わが名をさえも

三彦みつひこと書き、いつかは老おいの寢覚ねざめにも忘れがたない思出おもいでの夢たどを辿

つて年ごとに書綴りては出す戯作げきやくのかずかず。心なき世上の若者

淫いたすら奔いたすらなる娘の心を誘いざない、なおそれにても飽あき足たりらず、是非にも

弟子にと頼まれる勘当の息子たちからは師匠と仰がれ世を毒する  
なまめか  
 艶なまめかしい文章の講釈。遊里戯場の益もない故実こじつの詮議せんぎ。今更にそれ  
 を悔くやんだとて何としよう。自分を育てた時代の空気は余りに軟やわらかく  
 余りに他愛がなさ過ぎたのだ。近頃日光の御山おやまが頻しきりに荒出して、  
どこ  
 何処どこやらの天領では蛍ほたるや蛙かわずの合戦かつせんに不吉ふきつの兆しるしが見えたやうにやう。  
 果せるかな恐ろしい異人の黒船は津々浦々を脅おびやかすと聞くけれど、  
 ああこの身は今更に何としようもないではないか……。

種彦は書きかけた『田舎源氏』続篇の草稿の上に片かた肱ひじをつい  
 たまま唯ぼうぜん茫然ぼうぜんとして天井を仰ぐばかりである。物優しいあしおと登あしおと音おと  
はしごだん  
 が梯子はしごだん段だんに聞えた。そして葭よし簣すずこ越こしにも軽にく匂におわせるせんじよこう仙女せんじよこう香かう  
かおり  
 の薰かおりと共に、髪さがは下さかり鬚づとの糸いと巻まくまきくずし、銀ぎん胸むねの黄わう楊やうの櫛くしをさ

し、だんじゅうろうじま 団十郎縞の中に ちようじぐるま 丁子車を入れた ちゆうがた 中形の ゆかた 浴衣も涼  
しげに、こやなぎ 小柳の しま 縞の帯しどけなく ひっかけ 引掛にしめた女の姿、年の  
頃は はたち まだ二十ばかりと思われた。

「お園か。」とやさしく種彦は机の上に肱をついたまま こなた 此方を顧  
み、「おツつけもう子 ここのつ 刻だろうに した 階下ではまだ寝ぬのかえ。」

「はい。ただ今 ごしんぞさま 御新造様ももうお休みになるからと表の戸閉りを  
なすつていらつしやいます。」と女は うるしぬり 漆塗の ふた 蓋をした大きな  
ゆのみ 湯呑と ぞうげ 象牙の はし 箸を添えた菓子皿とを種彦の身近に すす 薦めて、まえざし 前挿  
かんざし の簪の おちかか 落掛るのをさし直しながら、「お たばこぼん 煙草盆のお火はよろ  
しゅう御ざりますか。」

「いや結構だ。何や か 彼やとよく気をつけてくれるから うち 家のものも

大助りだ。お園やお前さんも一ツ摘みなさい。廓ちやうにいて贅ぜいたく沢たくをした御前方おまえがたには珍めづしくもあるまいが、この頃は諸事御儉約の世の中、衣類から食物たべものまで無益な手数をかけたものは一切御禁止いっさいというきびしいお触ふれだから、この都みやこどり鳥とりの落雁らくがんも当分は食たべおさめ納なになるかも知れぬ。今の中遠慮うちなく食くべて置くがよいぞ。」

「はい。ありがとう御座ります。先ほど階下したで御新造様から沢山頂ちやうだい戴だいいたしました。時に旦那さま、そう申せばこの頃は何とやら大層世間が騒々しいそうで御座りますが、此方様こちらさまに私見たようなものがおりまして万もしも一の事でもありません。それがもう心配でなりません。」

「何さ、その事ならちつとも氣を揉むには当らぬ。お前の事は初し

よて  
手からいわば私が 酔 興すいきようでこうして隠かくつて上げているの故、余

計きがねな気兼をせずと安心していなさるがいい。」と種彦は取上げる

銀のべの 長煙管ながぎせるに烟けむりを吹きつつしみじみとお園の様子を打眺め、

「それにもうその 風俗なりふりなら誰が見ようと大丈夫だわ。中形の浴

衣いとまきくすに糸巻崩ちゆうやおびし昼夜帯ひつかけの引掛なちちという様子なり物言なちちいなり 仲

町ようの妓はおりと思う人はあるかも知れぬが、ついぞこの間ちようまで廓ちようにい

なすつた 華魁衆おいらんしゆうとはどうしてどうして気がつくものか。」

「ほんにそうだと、どんなに嬉しいか知れませんが。どうか一日も

早く堅気かたぎになりたいものと一生懸命に気をつけているのでありま

すが、どうかかいたすとい口の先へそうございますのありんすのと、

思わず里なまりの訛なまりが出そうになりまして、御新造様とお話をしていま



してもそれはそれはもう心配でなりません。」

「大きにそうであろう。まア何にしても当分は世を忍ぶ身体からだ。すつかり先方の話がまとまるまでは大事の上にも大事を取るに越した事はない。もう暫しばらくの辛しんぼう抱うだによつて滅多めったに外なぞへは出なさらぬがいいぜ。」

「はい。それはもう能よくわかつております。」と辞儀をしながらお園はなお何やら傍そばにいて尽きせぬ身の上の話でもしたいような様子であつたが、言葉を絶やすと共にそのまま腕を組む種彦の様子に、女は所在なげにその後うしろすがた姿すがたもしよんぼりと再び静かな聲あ音おとを梯子段はしごだんの下に消してしまつた。

## 四

家うちじゆう中ちゆうはそれなり寂しんとして物音を絶やした。今までは折々門  
 外こうじの小路に聞えた夜遊よあそびの人の鼻唄はなうた、遠くの町を流して行く新  
 内えんないの連弾つれびき、枝豆白玉えだまめしらたまの呼声など、いつ深ふけるとも知らぬ  
 町の夜の物音は忽ち彼方たちま此方かなたに鳴り出す夜廻りの拍子木に打消さ  
 れる折から、浅草寺あさくさでらの巨鐘きよしやうの声はいかにも厳おごそかにまたいか  
 にも穏おだやかに寝静まる大江戸の夜の空から空へと響き渡るのであつた。  
 すると毎夜種たねあぶら油ついえの費を惜しまず、三筋も四筋も燈とうしん心を投入  
 した修紫楼しゆむらさきろうの円行燈まるあんどうは、今こそといわぬばかり独りこの  
 戯作者げさくしやの庵いおりをわが物顔に、その光はいよいよ鮮かにその影はい

よいよ涼しく、唐机とうづくえの上なる書掛かきかけの草稿と多年主人あるじが愛あい翫かんの文房具とを照し出す。

孟宗もうそうの根竹に梅花を彫つた筆筒ふでづつの中に乱れさす長い孔雀くじやくの尾は行燈あんどうの火影ほかけに金光燦爛きんこうさんらんとして眼を射るばかり。長崎渡りの七宝焼しつぽうやきの水入みずいれは焼付やきつけの絵模様えもように遠洋未知の国の不思議ふしぎを思わせ、赤銅色しゃくどういろえ絵の文鎮ぶんちんは象嵌細工ぞうがんさいくの織巧せんこうを誇れば、傍かたわらなる茄子形なすびがたの硯石すずりいしは紫檀したんの蓋ふたの面に刻んだ主人が自作の狂歌、

名人になれく、茄子なすと思へども

とにかく下手へたは放れざりけり

という走書はしりがきの文字までをありありと読ませるのであつた。

種彦は忽ち今までの恐怖と煩悶に引替えていかなる危険を冒  
 しても、この年月精魂を籠めて書きつづけて来た長い長い物語  
 を、今夜の中にも一気に完成させてしまわなければならぬような  
 心持になるのであった。思返すまでもなく、それは実に寛政の  
 末つ頃、ふと己れがまだ西丸の御小姓を勤めていた頃の若  
 い美しい世界の思出されるまま、その華やかな記憶の夢を物語に  
 作りなして以来、年ごとに売出す合巻の絵草紙の数も重つて  
 天保の今日に至るまで早くも十幾年という月日を閲した。その  
 間というものは年ごとに咲く花は年ごとに散つて行つても、また  
 年ごとに鬢の毛の白さは年ごとに刻まれる額の皺と共に増つて行  
 つても、この修紫楼の深更を照す円行燈のみは十年一日の如くに

夜としいえば、必ず今見る通りの優しいなまめか艶しい光をわが机の上に  
 投掛けてくれたのである。種彦は半ば吞掛けた湯吞ゆのみを下に置くと  
 共に墨摺すみする暇もどかしげ気に筆を把とつたがやがて小半時こはんときもたた  
 ぬ中うちに忽ち長息ちやうたいそくを漏もらしてそのまま筆を投捨ててしまった。  
 そして恐るる如くに机から身を遠ざけ、どつさりと床とこの柱に背を  
 投掛け眼をつぶり手を拱こまねいたかと思うと、またもや未練らしく首  
 を延のばして、此方こなたからしげしげと机の上なる草稿を眺めやるのであ  
 った。

突然庭の彼方かなたに当つて風の音とも思われぬ怪しい物音がした。  
 種彦は慄りっぜん然としてわが影にさえ恐れを抱く野犬のいぬのように耳を聳そはだ  
 てたが、すると物音はそれなり聞えず二階の夜は以前の通り柔か

な円行燈の光ばかり。けれども種彦が再び草稿の上に眼を注ぐ  
とした時今度は何者か窃ひそかに忍しのびよ寄よるような蹙あしおと音が聞えたので、  
いよいよ顔の色を失うと共に行燈の火を吹消すが早いか、種彦は  
一刀を手にして二階の丸窓をば音せぬように押開き庭かたの方を見下  
した。半月が斜めに悲しげ気に丁度隣家となりの屋根の上に懸かかっている。  
晴れた空には早や秋の気が十分に満みちわた渡たっているせいか銀河を始  
め諸あちゆ有ある星の光は落ちかかる半はん輪りんの月よりもかえって明あかるく、石  
燈籠しどうろうの火の消残こにわる小庭のすみずみまで隈くまなく照しているように  
思われた。犬の吠ほえる声もない。怪し気な人影などは更に見当る  
うはずもない。手入を怠らぬ庭の樹木と共に飛とびいし石いしの上に置いた  
盆栽の植木は涼しい夏の夜の露をばいかにも心地よげに吸つてい

るらしくおだや穩かなその影をば滑らかなこけ苔と土の上に横よこたえていた。軒  
 の風鈴ふうりんをさえ定かには鳴らし得ぬ微風そよかぜ——河に近い下町の人  
 家の屋根を越して唯ゆる緩く大きく流動している夜気のそよぎは、窓  
 から首を差延さしのぼす種彦が鬢びんの毛を何ともいえぬほど爽さわやかに軽く吹  
 きなびかせる。種彦はわが身の安危をも一時に忘れ果てたように、  
しばし暫は唯茫ぼうぜん然とこの得えもいわれぬ夜の氣に打たれていたが、する  
うち中、忽こつぜん然わが家の縁先から、こは如何いかに、そつと庭の方へと降お  
りた立つ幽霊のような白い物の影。

再び刀を杖つえに半身はんしんを屋根の方へ突出してよくよく見れば、消  
 えようとして更に明あかく頻しきりと瞬またたきする石燈籠の火影ほかげにそれは誰ある  
 う、先ほど湯呑に都鳥の菓子を持添えて来たかのお園ではないか。

仔細しさいあつて我家にかくまうそれまでは新吉原しんよし佐野しわら樋屋さのつちやの抱え喜き  
ちよう蝶と名乗つたその女である。おろおろしつつも庭の柴折戸しおりどに進す  
すみよ寄り音せぬように搔かき金がねをはずすと、自らおのずか開く扉の間から物腰  
 のやさし気な男が一人手てぬぐい拭ぬぐに顔をかくし這はわぬばかりに身をか  
 がめて忍び入つた。二人は少時しばし立ちすくんだまま互たがいに姿さえ恐る  
 る如く息を凝こらして見合つていたが、やにわに双方から倒れかかる  
 ように寄添よりそいぎま、ひしと抱いだき合つて、そのまま女は男の胸に、  
 男は女の肩の上に顔を押当て唯ただただ声を呑のんで泣沈なんだらしい様  
 子である。

種彦は最初一目見るが早いしのびか、忍入つた彼の男といはほど遠  
 からぬ鳥越とりごえに立派な店を構えた紙問屋の若旦那で、一時己おのれの



弟子となつた処から柳絮りゆうじよという俳号をも与えたものである事を知っていた。若旦那柳絮はいつぞや仲なかの町の茶屋ちやうに開かれた河か東節とうぶしのお浚さくらいから病付やみつきとなつて、三日に上げぬ廓くるわがよ通とほいの末きまはお極きまりの勘かんと当とうとなり、女の仕送りを受けて、小梅こづめの里しの知りびと人の家やにその日を送っている始末。もしやこのまま打捨てて置いたなら心中もしかねまいと、種彦ちかづきは知己ちかづきの多い廓ひとまの事とて適當あつの人を頼んで身請みうけや何かの事は追おつての相談ひとまに、一先ひとず女まをわが家やに引取り男の方かたへは親許おやぢの勘当かんとゆりるまで少しの間辛抱しんぱうして身をつつしむようにといい含めて置いたのである。然しかるをやつと半月げつたつかたためたがに若い二人はもう辛抱しんぱうがしきれずに、いつ謀しめし合あしたものが互たがに時刻じこくを計かけて忍逢しのびあおうという。誠まことに怪けしからぬ

事だと種彦は心の中に憤ろうと思ひながら、自分にも幾度か覚えのある若い昔を思い返せば、何も彼も無理はない事と訳もなく同情してしまわなければならぬ。それと共にいかに恋ゆえとはいながらかほどまで義理も身も打捨てて構わぬ若い盛りの無分別ほど羨ましいものはないと思うのであった。ああ、あの無分別半分ほどもあるならば自分は徳川の世の末がいかになり行こうと、あるいは自分の身がいかに処罰されようと、そんな事には頓着せず、自分の書きたいと思うところをどしどし心の行くままに書く事ができたであろう。悲しむべきは何につけても勇氣の失せ行く老境である。

通り過ぎる村雲がいつの間にか月を隠してしまった。すると最

前から瞬まばたきしていた石燈籠いしどうろうの火も心あり気げにはたと消えるを幸  
 い、二人の男女は庭の垣根かきに身を摺すり寄せて互の顔さえ見分けぬほ  
 どな闇やみの夜をかえつて心安しと、積つもる思いのありたけを語り尽つく  
 うと急あせれば、一ひと時とき鳴く音を止めた虫さえも今は二人が睦むつ言こと  
 を外へは漏もらさじと庇かばうがように庭一面に鳴きしきる。やがて男は  
 名残惜し気に幾いく度たびか躊躇ためらい一つも漸しだくに気を取直し地に落ちた  
 手拭てふきに再び顔をかくして立上ると、女も同じく落ちたる櫛くしに心こころ  
 付づながら乱れた姿を恥はらう色もなく少時しばし寄添よい、やがて男が出  
 て行く庭木戸を閉めた後あとまでもなかなかその場を立ち去りかねた  
 様子であつた。

## 五

翌あくるひ日の朝種彦は独り下座敷なる竹の濡縁ぬれえんに出て顔を洗い  
 食事を済ました後のちさえ何を考へるともなく折々毛拔けぬきで頤鬚あごひげを抜  
 きながら、昨夜ゆうべ若い男女の忍び逢あつたあたりの庭面にわもせに茫然眼ぼんやりを  
 移うつしていた。折から、「おや先生もうお目覚めざめでいらッしやいます  
 か。」

「大層お早いじや御座いませんか。」といいながら愛雀軒あいじゃくけんと  
 いう扁額へんがくを掛けた庭の柴折戸しおりどを遠慮なく明けて入つて来たのは  
 柳下亭種員りゆうかていたねかずに笠亭りゆうてい仙果せんかと呼ぶ兩人ふたりの門弟である。全くい  
 つもより朝はまだよほど早かつたらしい。二人が押開く柴折戸の

裾すそに触れて垣かきぎわ際に茂おさつた小笹こささの葉末から昨夜ゆうべのままなる露の玉が、斜ななめにさし込む朝日の光にきらきらと輝きながら苔こけの上にこぼれ落ちた。種彦は機嫌よく、

「朝あさ起おきは老人としよりのくせさ。お前たちこそ今日は珍らしく早起をしたもんだな。それとも昨夜ゆうべの幕の引つ返しという図かね。」

「てつきり恐縮と申上げたい処ですが近頃はどうぞ致しまして。どこもかしこも火の消えたようでいや早や情ない位で御座います。」

「いずこも同じ秋の夕暮かな。」と種彦は戯れながらふと植うえ込こみに吹入る朝風の響ひびきに、「いや暑い暑いといっている中うちもう秋風が吹くと見える。」

「眼にはさやかに見えねどもと古歌にも申す通り、風の音にぞ驚

かれぬるで御座います。」といいながら種員は懐中ふところの手拭てぬぐいを出して雪駄せったばきの裾すそを払い濡縁ぬるゑの上に腰を下したが、仙果は丁度おのれたず己が佇とびいしんだ飛石とびいしの傍そばに置いてある松の鉢物はちものに目をつけ、女の髪にでも触るような手付で、盆栽の葉を撫なでながら、

「先生これアいつお求めになりました。木の太さほくといい枝ぶりといい実に見事な盆栽で御座いますな。」

「それはこの中じゆううけじむら請地ちようべえ村の長兵衛まつしという松師まつしに頼まれて、庭木戸の額を書いてやった返札に貰もらったのだが、売買いにしたらなかなか吾輩こちとらの手に這入はいる品ではあるまい。」

「お屋敷方でも滅多めったにこんな名木めいぼくは見られますまい。」と種員くわえぎせるも今は銜煙管くわえぎせるのまま庭の方へ眼を移したが突然思い出したよう

に、「先生。こういう盆栽なんぞはいかがなものでしよう。当節じややはり雛人形ひなや錦絵にしきえなんぞと同じように表おもてむき向むきには出せない品ものなんで御座ございませうか。」

「勿論もちろんそのはずだらうさ。」と種彦は無造作にいい捨てて銀の長煙管ながぎせるで軽く灰吹はいふきを叩たたいた。

「へーえ。やつぱり不可いけないんで御座ございますかね。こうなると手前かみ共にやどうもお上の御趣意ごしゆいが分わかりかねます。」

「なぜさ、無益むえきなものに贅ぜいを尽つくすなど申すのではないか。」

「それがで御座ござりますよ。大きな声では申まをされませぬが私わたくしども共どもの考えかんがえすには無益むえきなものに手数てすうをかけて楽たのしんでいられるようなら此こゝ様さま結構けいこうな事ことはないじや御座ございませんか。天下太平国土安穩てんたへいこく土あんゑん

なりやアこそ楽しんでおられるんで御座います。もしこれが明めいれ  
 曆きの大火事や天てん明めいの飢饉ききんのような凶年ばかり続いた日にや、  
 いくら贅ぜいたく沢たくがいたしたくてもまさかに盆栽や歌俳はい諧かいで日を送  
 るわけにも行きますまい。ところが当節の御時勢は下しも々しもの町人  
 風情ふぜいでさえちよいと雪でも降ふつて御覽ごらんじろ、すぐに初雪や犬の足  
 跡梅の花位の事は吟咏くちずさみます。それと申すも全く以て治まる御世みよ  
 のおかげ、このような目出たい事は御座いますまい。」

「なるほどこれア種員さんのいいなさる通り。恐れながら手前な  
 ども今度の御趣意ごしゆいについちや随分と腑ふに落ちない事が御座います  
 。」

盆栽に気を取られていた仙果もいつか縁側に腰をかけ、あたり



に聞く人もないと思う安心から種員と一緒にたつて遠慮なくその  
思ふ処を述べようとする。

「下々の手前たちがとやかくと御政事向むぎの事を取沙汰致すわけ  
は御座いませんが、先生、昔から唐土もろこしの世には天下太平しるしの兆  
は綺麗きれいな鳳凰ほうおうとかいう鳥が舞まい下ると申します。しかし当節の  
ようにこう何も彼も一概に綺麗なもの手数のかかったもの無益な  
ものは相あいならぬと申してしまつた日には、鳳凰なんぞは卵を生む  
鶏じゃ御座いせんから、いくら出て来たくも出られなからうじ  
や御座いせんか。外ほかのものとはとかくと致して日本一お江戸の  
名物と唐天竺からてんじくまで名の響いた錦絵まで御差止めになるなぞは、  
折角天下太平のお祝いを申しに出て来た鳳凰の頸くびをしめて毛をむ

しり取るようなものじや御座いますまいか。」

「はははは。幾いほどお前まへたちが口惜くちおしく存ぞんじても詮せんない事ことさ。と

かく人の目を引くような綺麗なものは何の彼かのと妬ねたまれ難癖なんへきを付

けられるものさ。下々の人情も天下の御政事も早い話が皆同じ訳わけ

合あと諦あきらめてしまえばそれで済むこと。あんまり大きな声で滅多めった

な事をいいなさるな。口舌こうぜつ元がん来らい禍わざわい之の基もと。壁にも耳のあ

る世の中だ。まあまあ長いものには巻かれていゝが一番だよ。」

「それアもう仰おつしや有るまでもなく承知いたしております。つまら

ない饒おしやべり舌かをして掛替かのない首くでも取られた日にや御溜おたまりこ小法こ

師ぼしが御座まいませんや。こういう時には何か一首うま巧くわい落首らくしゆでもや

つて内所ないしよでそつと笑わらっているが関せきの山やまで御座まいます。」

「落首といえばそうそう、昨夜先生がお帰りになつてから鶴屋の旦那に聞いた話で御座りますが、あの和泉町の一勇齋国芳さんが今度の御政事向の事をばそれとなく「源の頼光御寢所の場」に譬えて百鬼夜行の図を描き三枚続きにして出したとかいう事で御座ります。」

「いや早や、あの男も持つて生れた悪い病がまだ直らぬと見える。国芳も国貞も俱ともに故人豊国翁の高弟だが、二人はまるで気性がちがい国芳は喧嘩けんかの好きな勇みな男いかさまその位の事はしかねまいて。一寸いっすんの虫にも五分ごぶの魂というのが当節はその虫をばじつと殺していねばならぬ世の中。ならぬ堪忍するが堪忍とはまず此処ここらの事だわ。」

「何に致せいやな恐ろしい世の中になつたもので御座います。この分では先生。とても『田舎源氏』の後篇もいつ拝見致される事やら、情ない事で御座いますなア。」

「私も最<sup>わたし</sup>う追<sup>おい</sup>々に取る年だ。世間の取沙汰の静<sup>しずか</sup>になるのを待つている中<sup>うち</sup>には大方眼も見えず筆を持つ手も利かなくなろう……。」「

淋<sup>さび</sup>しい微笑と共に種彦は言葉を絶やした。二人の門弟も今は言出すべき言葉なく、遣<sup>やり</sup>場のない視線をば追々に夏の日のさし込ん  
で来る庭の方へ移したが、すると偶然垣根の外には大方<sup>いちげつじ</sup>一月寺  
あたりから来る虚無僧<sup>こむそう</sup>であろう、連<sup>れん</sup>管<sup>かん</sup>に吹き調べる「虚空鈴慕<sup>こくうれいぼ</sup>」  
の一曲が一座の憂愁をば一層深くさせるようにいとど物淋しく聞  
え出すのであった。

## 六

夏の盛さの六月もいつか晦日みそか近くなつた。お江戸の町々を呼歩く  
 蚊帳かやうり売の声と定齋じようさい売の環かんの音ねに、日盛ひざかりの暑さは依然として  
 何の変りもなかつたが、とにかく暦の表だけではいよいよ秋とい  
 う時節が来ると、道行く若いものの口々には早くも吉原よしわらの燈とうろ  
 籠うの噂うわさが伝えられ、町中まちなかの家々にも彼方かなた此方こなたと軒端のきばの燈籠とうろうが  
 目につき出した。

土用の明けるその日を期して、池上いけがみの本門寺ほんもんじを始め諸処の  
 古寺では宝物の虫干かたがた諸人の拝観を許す処が多い。種彦の

家でも同じくその頃に毎年蔵書什器じゅうきの虫むし払ばらいをする。そしてその日の夕刻からは極ごくく親しい友人や門弟が寄集あつつて主人柳亭翁あるじが自慢の古書珍本ちんぽんの間に酒を酌くみ妓ぎを聘へいして俳諧はいかいまたは柳風りゅうふうの運座うんざを催すのが例であつた。けれども今年ばかりはわざわざそれらの蔵書什器を取り出して厳しい禁令の世の風かぜに曝さらすという事がいかにも空恐ろしく思われた処から、種彦はわが秘蔵の宝をもよし蠹むしが喰うならば喰うがままにと打捨うてて置く事にした。

實際種彦はもう何をする元氣もなくなつてしまつたのである。老朽おいくちて行くその身とは反対に、年と共にかえつて若く華やかになり行くその名声をば、さしにも広い大江戸は愚か三ヶ《さんが》の津つの隅々にまで喧けん伝でんせしめた一代の名著も、あたらしいこのまま

完成の期なく打捨ててしまわなければならぬのかと思うと、如何いかにしても癒いやしがたい憂憤の情は多年一夜の休みもなく筆を執つて来た精魂の疲労を一時に呼起し、あるかぎりの身内の力を根こそぎ奪い去つてしまつたような心持をさせるのである。禁令の打撃のどかに長閑な美しい戯作げさくの夢を破られなかつた昨日きのうの日と、禁令の打撃のどかに身も心も恐れちぢんだ今日きょうの日との間には、劃かく然ぜんとして消す事のできない境界さかいができた。そして今日こんにちという暗澹あんたんたる此方こなたの境から花やかな昨日きのうという彼方かなたの境を打眺すでめて見ると、わが生涯すでというものは今や全く過去に属して已すでに業すでにその終局を告げてしまつたものとしか思われぬ。何一ツ将来に対して予期する力のなくなつた心のほどのいたましさは己おのが書齋の書棚一ぱいに飾

つてある幾多の著作さえ、それらは早何となく自分の著作というよりはむしろ既に死んでしまった或親あるしい友人——その生涯の出来事を自分はことごとく知り抜いている或親しい友人の遺書であるような心持がする。

種彦は日ごと教をおしえ乞いにと尋ねて来る門弟たちをも次第々々に遠ざけて、唯一人二階の一間ひとまに閉籠とじこもつたまま、昼となく夜となく、老眼鏡の力をたよりにそもそも自分がまだ柳やなぎの風かぜ成なりなぞと名乗つて狂歌せんりゆう川柳くちゆうを口咏くちゆうんでいた頃の草双紙くさごうしから最近の随筆『用捨箱』ようしやばこなぞに至るまで、凡て立派な套入すべにしてある著作の全部をば一冊々々取出して読み返しつつ、あああの双紙を書いた時分じぶんには何をしていた。ああこの物語を書いた頃には自分



はまだ何歳であつたかと徒いたずらに耽ふける追憶の夢の中に、唯うつらうつらとのみその日その夜を送り過した。宛さなら山吹の花の実もなき色香を誇るに等しい放蕩ほうとうの生涯からは空しい痴情ちじょうの夢の名残はあつても、今にして初めて知る、老年の慰藉なぐさみとなるべき子孫のない身一ツの淋さびしさ果敢はかなさ。それを堪え忍ぼうとするには全く益もない過去の追憶に万事を忘却する外ほかはない……。

七たな夕ばた

の祭はいつか昨日きのうと過ぎた。

小夜更さよふけてから降り出した

小雨こさめのまた何時いつか知ら止やんでしまった

翌あくるあさ朝、空は初めていか

にも秋らしくどんよりと搔かき曇くもり、濡ぬれた小庭の植込さわかからは爽さわな

涼風が動いて来るのに、種彦は何という訳もなく瓦焼かわらく烟けむりも哀あれ

に橋場はしばい今戸まの河岸たちに立初たちめる秋の風情の尋ねて見たく、臥床ふしどを出

るや否やいそいで朝あさはん飯ととのを準えようと下座敷へ降りかけた時出で  
あいがしら合頭はしごだんにあわただしく梯子段を上つて来たのは年寄つた宿の妻  
 であつた。しかも容易ならぬ事件を種彦に伝えたのである。

小雨そぼ降る七夕の昨夜ゆうべ久しく隠まつて置いたかのお園は何処いずこ  
 へか出しゅっぱん奔しゅっぱんしてしまつたものと見え今朝方寝床は藻抜もぬけの殻とな

り、残るは唯男女が二通の手紙ばかりという事である。種彦は机  
 の上の眼鏡取るより早く男女の手紙を読み下した。海山にもかへ  
 がたき御恩を仇あだにいたし候罪科そうろうみとが、来世のほどもおそろしく存じ  
 まゐらせ候……とあつてお園の方の手紙にはただ二世にせも三世さんぜまで  
 も契りし御方おかたのお身みのうえ上に思いがけない不幸の起りしたため、とて  
 もこの世では添われぬ縁故ゆえ、一先ひとまずわが親里の知人しりびとをたより其そ

処こまで落延びてから心安く未来の冥みようが加を祈り、共々にあの世へ  
 旅立つという事の次第がこまごまと物哀れに書いてあつた。覚え  
 ず涙に曇る眼まなこぬぐを拭い種彦はやがて男の手紙を開くに及んで初めて  
 深い事情を知り得た。先頃から、これも要するにこの度たびの御政事ごせいじ  
 向御改革むきの影響といわねばならぬ。若旦那の親元なる紙問屋は江え  
 戸どじゅうとんやじつくみ中間屋十組の株が突然御廃止になつたため、それやこれやの  
 手違いより俄にわかに莫ばくだい大の損失を引起し家倉を人手に渡すも今日きょうか  
 明日あすかという悲運に立至つた。親の家うちが潰つぶれてしまえば頼みに思  
 う番頭から詫わびを入れて身受みうけの金を才覚してもらおうという望のぞみも  
 今は絶えた訳わけ。さらばといつてどうして今更お園をば二度と憂うれき  
 川かわ竹たけの苦界くがいへ沈しずめられよう。身受する力も望みもなくなつて唯い

つまでも大金のかかった女を人の家に隠匿かくまつて置いたなら、わが身のみかは恩義ある師匠にまでいかなる難儀を掛けるも測はかられぬ。それ故ゆえ事の面倒めんどうにならぬ中うちわが身一つに罪を背負つて死出の旅路こころざしもうしそろううを志し申候まうしそろうう。何とぞ後のちの回向えこうをたのむとあつた。

種彦は菱垣船ひしがきぶねや十組問屋仲間の御停止ごちようじよりさしもに手堅い江戸中の豪家にして一いつちよう朝あさに破産するものの尠すくなくない事を聞知つていた処から、今更ながら目まの当りこの度たびの法令の恐しい上にも恐しい事を思知るばかり。死に行くという若いもの供どもの身上についてはさしずめ如何いかなる処置を取つてよいのやら全く途方に暮れてしまった。

## 七

全くどうにも仕様のないこの場合に立至つては今更のめのめと  
 柳 絮りゆうじよが親元の紙問屋へ相談にも行かれず、同時に廓くるわの方面に  
 もいわばそれとなく自分が身受みうけの証人にもなつたような関係から  
 うっかりと顔出しも出来ぬ。といつてこのまま知らぬ顔に打捨て  
 ても置かれまいと種彦は思案に暮れたあまり、ふらりと家を出いで  
 足の向く方へと歩いて行つた。歩いて行く中うちには何とかよい考え  
 が出るかも知れぬとたよりにならぬ事をたよりにするより仕様が  
 なかつた。

さまざまな物売の声と共にその辺へんの櫛れん子じ窓まどからは早けいや稽古この

唄うた三味線みやげせんが聞え、新道しんみちの路地口ろじぐちからは艶なまめかしい女の朝湯あさゆに出  
 て行く町家まちやつづきの横町よこちようは、物案顔ものあんじがおに俯向うつむいて行く種彦たねひこ  
 をば直様すぐさま広い並木なみきの大通おとおへと導おどいた。すると忽たちまち河岸かの方し  
 から颯さつとばかり真正面まともに吹きつけて来る川風かみかぜの涼すずしさ。種彦たねひこはさ  
 すがに心の憂苦うれを忘れ果はてるというではないが、思おもえばこの半月げつげ  
 あまりは一歩ひとあしも戸外そとへ出でず引籠ひきこもつてのみいた時に比ひべると、  
 おのずと胸むねも開ひらくような心持こころもちになり、少時しばしは何なにの気苦き労らうもない人  
 のように目めに見える空そらと町まちとの有様ありさまをば訳わけもなく物珍ものめづし氣きに眺ながめ  
 やるのであつた。

両側りょうがわとも菜飯なめしでん田楽でんがくの行燈あんどうを出だした二階立だいての料理屋りょうりやと、往おうら  
 来いを狭せむるほどに立連たちつらなつた葭簀よしず張はりの掛茶屋かけちや、またはさ

まざまなる大道店だいどうみせの日傘ひがさの間をば士農工商思い思いの扮装みなりかたち形容かたちをした人々が後あとから後あとからと引きも切らずに歩いて行く。それはこの年月幾度いくたびと知れず見馴みなれた上にも見馴みなれた街の有様ながら、しかしここに住馴なれた江戸ツ児の馬鹿々々しいほど物もの好ずきな心には、一日半日の間も置きさえすれば忽たちまちにして十年も見なかつた故郷ふるさとのように訳もなく無限の興味を感じさせるのである。

早や虫売の荷が見える。花売の籠かごの中にはもう秋の七草が咲き乱れている。しかし其様事そんなには目もくれずお蔵くらの役人衆らしいお侍は仔細さいしらしい顔付かおつきに若党を供につれ道の真中まんなかを威張おどつて通ると、摺違すれちがいざまに腰を曲かがめて急いそがし氣に行過ぎるのは札差ふださしの店に働く手代てだいにちがいない。頭巾ずきんを冠かむり手に数珠じゆずを持ち杖つえつき

ながら行く老人としよりは門跡様もんぜきさまへでもお参りまいする有徳うとくな隠居いんこである  
 う。小猿を背負った猿廻しの後あとからは包つつみを背負った丁稚てつち小僧が続  
 く。きいた風な若旦那わいかいしは俳諧はいかいし師らしい十徳じつとく姿の老人と連れ立  
 ち、角つのかく隠しに日傘かざを翳うわした上かたつ方の御女中ゆきちがはちよこちよこ走り  
 の虚無僧こむそうげた下駄こづまに小褌こつちまを取った芸者ゆきちがと行交ゆきちがえば、三尺さんじやく帯おびに手  
ぬくい拭ぬぐを肩にした近所わかいしゆの若衆わかいしゆは稽古けいこ本抱ほんだえた娘むすめの姿すがたに振向ふるむかき、菅す  
げがさ笠がさに脚絆きゃはん掛かけの田舎者いんげは見返みかへる商家きんかの金看板きんかんばんに驚嘆おどろきの眼めを睜みはつ  
 て行くと、その建たち続つづく屋根やねの海うみを越こえては二、三羽とんびの鳶たねが頻しきりと  
わ環かを描かいて舞まっている空そら高く、何処どこからともなく勇むねあましい棟上むねあげ  
きやりの木遣きやりの声こゑが聞きえて来るのであつた。やや太ふとく低ひいけれども極ごくめ  
 て力ちからのある音頭おんどとり取とりの声こゑと、それにつづいて大勢おほしの中なかにもとりわ



け一人二人思うさまかんだか甲高たかな若い美しい声の打うちまじ交まじった木遣うたの唄うたは、折おからだの穩やかな秋あきの日に對して、これぞ正まさしく大江戸おの動うごかぬ富とみを作り上げた町人の豪ごう奢しやと弓矢ゆみやはもう用もちをなさぬ太平たいへいの世よの喜よろこびとを、江戸中えどの町々まちまちへ歌うたい聞きかせるような心持こころもちがするのである。

種彦たねひこは唯ただどんよりした初秋しゅあきの薄曇うすくもり、この勇いしい木遣きぢの声こゑに心こゝろを取とられながらまかたぞろぞろと歩いてなみきいる町まちの人々ひとと相あ前後いして、駒こま形かたちから並木なみきの通りかみなりもんを雷かみなりもん門かどの方かたへと歩いて行く中うち、何い時つともなしに我われもまた路みち行く人ひとと同じように、二百余年にっぴやくねんの泰平たいへいに撫な育くまれた安楽あんらくな逸民いつみんであるといわぬばかり、知らず知らずいかにも長なが閑どやかな心こゝろになつてしまふのであつた。今更いまさらことごとしく時勢ときせいの非ひ

なるを憂いたとて何になろう。天下の事は微<sup>びろく</sup>緑な我々風情がとや  
 かく思つたとて何の足<sup>たし</sup>にもなろうはずはない。お上<sup>かみ</sup>にはそれぞれ  
 お歴々の方々がおられるではないか。われわれは唯その御支配の  
 下<sup>もと</sup>に治<sup>おさま</sup>る御世<sup>みよ</sup>の楽しさを歌にも唄い絵にも写していつ暮れるとも  
 知れぬ長き日を、われ人共に夢の如く送り過すのがせめてもの御  
 奉公ではあるまいか。種彦は丁度<sup>ぶんどごぶし</sup>豊後節全盛の昔に流行した文<sup>ぶ</sup>  
 金風<sup>んきんふう</sup>の遊治郎<sup>ゆうやろう</sup>を見るように両手を懐<sup>ふところ</sup>中に肩を落し何処<sup>どこ</sup>を風  
 がという見<sup>みえ</sup>得<sup>え</sup>で、いつのほどにか名高い隅<sup>すみ</sup>田川<sup>だがわ</sup>という酒問屋<sup>さかどんや</sup>  
 の前<sup>あた</sup>辺りまで来たが、すると、忽<sup>たちま</sup>ち向うに見える雷門の新橋<sup>しんばし</sup>と  
 書いた大提灯<sup>おおちようちん</sup>の下から、大勢の人がわいわいいつて駈<sup>かけ</sup>出して  
 来るのみか女の泣声までを聞付けた。ソラ喧嘩<sup>けんか</sup>だ人<sup>ひと</sup>殺<sup>ころ</sup>だとい

うが早いか路行く人々は右方左方へ逃うほうさほう惑にげまどうものもあれば、我遅れじと駈ほけつけるものもある。その後につづいて町の犬が幾匹ともなく吠えながら走る。

種彦は依然として両手を懐ふところ中にこの騒ぎも繁華なお江戸ならでは見られぬものといわぬばかり街の角かどに立止つて眺めていたが、しかし走はせちが交ちがう群集さえぎに遮られて実は何の事件ことやら一向に見定める事が出来なかつたのである。

「先生。」と突然横合から声をかけたものがある。

「いや。仙果せんかに種たね員かずか。あの騒ぎは一体どうしたものだ。」

「先生。大変な騒ぎで御座ります。奥山おくやまの姐ねえさんが朝腹あさつばらお客を引込もうとした処を隠密おんみつに見付みつかりお縄を頂戴ちようだいいたした

ので御座ります。」

「ふうむさようか。」と種彦もさすが事件の意外なるに驚いた様子。「奥山の茶見世ちやみせなどは昔から好よからぬ処ときまつたものではないか。今更かくし隠売女ばいじよの一人や二人召捕えた処で仕様もあるまい。」

「先生それではまだ昨夜ゆうべからの騒ぎを御存じがないと見えますな。」

「はて、昨夜からの騒ぎというのはそれア何事だ。お前たちも知つての通り私わしは先月このかた以来外へ出るのは今日が初めて……。」

「実はこれから二人して御機嫌伺いに上ろうと思つていた処で御座ります。今日はもうどこへ参りましてもその話ばかりで持切つ

ております。昨日の晩はなかわど花川戸の寄席よせで娘浄瑠璃むすめじようるりが縛あげられる。それから今朝ひろこうじになつて広小路の芸者屋げいしやで女髪結かみゆいが三人まで御用になりました。何でもつい二、三日前御本丸で御役替おやくがえがありまして、大目付おおめつけの鳥居様とりいさまが町奉行におなり遊ばしてから俄にわかに手巖いえぬししい御詮議ごせんぎが始まったとやら。手前供どもの町内などでも名主なぬしや家主いえぬしが今朝はもう五ツ頃から御奉行所へお伺いに出るような始末で御座います。」

「なるほど、それは全く容易ならぬ次第だな。」

「先生、まだそればかりでは御座りません。昨夜ゆうべちよつと櫓やぐら下たの方へ参りましたら、何でも近い中に御府内ごふないの岡場所は一ツ残らずお取払いになるとかいう騒ぎで、さすがの辰巳たつみも霜枯れ同

様寂れきつておりやした。」

「そうか。世の中は三日見ぬ間の桜ではない。桜を散らすとんだ  
夜嵐……。」

「先生、とにかく境内を一まわり奥山辺までお供を致そうじや  
御在ませんか。」

「そうさな。人の難儀を見て置くも気の毒ながらまた何ぞ後の世  
の語草かたりぐさになろうも知れぬ。どれぶらぶら参ろうか。」

三人は歩き出した。雷門前の雑沓ざつとうはどうやら静まった様子で  
あるが、まだこの辺へんをばあちこちと不安な顔付して行交う人たち  
の口々に、町木戸まちきどの大番屋おおばんやで召捕めしとられた売女の窮命きゆうめいされている  
有様が尾に鱒ひれ添ひえていかにも酷むごたらしく言伝えられている最さいちゆ

中うである。種彦を先に種員と仙果は雷門を這入はいつて足早に立並ぶ数珠屋じゆずやの店先を通とおりすりす過ぎにじつけんぢやや二十軒茶屋の前を歩いて行つたが、いつも五月蠅うるさいほどに客を呼ぶ女供どもはやがて仁王門を這入はいつた楊ようじ子みせ店も同じ事で、いずれも真ま蒼さおな顔をして三人四人と寄合あいながら何やらひそひそ話合かつていと、土地の顔役らしい男がいかにも事あり氣に彼方かなた此方こなたと歩き廻まつていた。しかし何と言つてもさすがは広い觀音の境内、今いま方がたそんな騒さわぎのあつたとも心附かぬ参詣さんけいの群集ぐんじゆは相も変わらず本堂の階段を上あり下おりしているあと、いつものように、これも念仏堂の横手に陣取まつた松井源水まついげんすい、またはかの風流志道軒ふうりゆうしどうけんの昔より境内の名物となつた辻講釈つじかうしゃくを始めとして、その辺へんに同じように葭篋張よしずばりの小屋を仕つらえた乞こ

食芝居じきしばいや桶おけぬ抜け籠かごぬけ拔ぬなどの軽業師かるわざしも追々に見物みものを呼び集めて  
 いる処であつた。

一同はそれらの小屋をも後にして俗に千本桜といわれた桜の立  
 木の間をくぐり抜け、金竜山きんりゅうざん境内の裏手へ出るとそぞろ本山  
 開基の昔を思わせるほどの大木が鬱々うつうつとして生茂おいつている。そ  
 の木陰こかげに土弓場どきゆうばと水茶屋みずちやの小家こいえは幾軒となく低い鱗こけらぶき茸きのこの  
 屋根を並べているのである。毎夜ほおかむり類るい冠かんむりして吉原よしわらの河岸かしのり通  
 をぞめいて歩くその連中と同じような身なりの男が相あいも変らずそ  
 の辺をぶらりぶらり歩いていたが、さすがに唯ただ今いま方世かたよにも恐ろ  
 しい騒動のあつた後あととて女供は一斉に声こゑを潜ひそめ姿を隠してしまつ  
 たので、いつもはそれほどに耳立たない裏田圃たんぼの蛙かわずの啼なく音ねと梢こずえ



に騒ぐせみ蝉の声とが今日に限って全くこの境内をば寺院らしくゆうす幽  
 邃いかんが閑雅にさせてしまったように思われた。さながら人なき家の  
 如く堅くも表口の障子を閉めてしまった土弓場の軒端のきばには折々時  
 ならぬ病葉わくらばの一片ひとひらふたひらふたひらと閃き落ちるのが殊更あわれに哀深く、よ葎しず  
 を立掛けた水茶屋の床しろうぎ几いたずらすりこには徒に磨込んだ真しんちゆう鍬ちやがまの茶釜  
 にばかり梢を漏もれる初秋の薄日のきらきらと反射するのがいい知れ  
 ず物ものさび淋しく見えた。何処か見えない木立の間から頻しきりと笑うが如  
 き鳥からすの声が聞える。

種彦は何という訳わけもなく立止たまりつて梢を振ふり仰あおいだ。枯枝の折れ  
 たのが乾いた木の皮と共に木葉このはの間を滑なつて軽く地上に落ちて来  
 る。大方蝉ついでばを啄ついでばもうとして鳥からすはその餌えぼを追おうて梢から梢にと飛移

つたに違いない。仙果は人氣ひとけのない水茶屋の床几しょうぎに置き捨ててある煙草盆たばこぼんから勝手に煙草の火をつけようとして、灰ばかりなのいしにちよつと舌鼓を打ったが、そのまま腰を下し懐中ふところから火ひうち打石いしを捜出さがしだしながら、

「先生一服いかがで御座います。いつもなら、もう種員さん、この辺は河岸縁かしのぶちの三日月長屋みかづきなやも同然滅多めったに素通すどおりの出来る処じやないんだが、今日はこうして安閑と煙草が呑のんでいられるたア何だか拍子拔ぬけがして狐きつねにでもつままれたようだ。」

「真白まっしろなこんこん様は何処おあなの御穴ごあなへもぐり込んだのか不思議に姿をくりましたもんさな。何しろ涼しくって閑静でいい。それにいくら涼んでもお茶代いらすというのだからこれがほんありがたに有難ありがた

やまの 時 鳥さ。一と腰なる 一 提ひとつきげを取出して種員は仙果の  
 煙管きせるから火をかりて一服した。

なるほど涼しい風は絶えず梢の間から湧わき起つて軽く人の袂たもとを  
 動かすのに種彦もいつか門人らと並んで、思掛けない水茶屋みずぢややの  
 床しやうぎ几に腰を下し草くたぶれ臥あゆみた歩を休ませた。折から梢の蟬なくねの鳴音を  
 も一時いちじに止めるとどばかり耳許みみもと近く響き出す弁べんてん天山の時の鐘。数  
 うれば早や正午ひるの九つを告げている。種彦はどこかこの近辺に閑  
 静で手軽な料理茶屋でもあらば久ぶり門人らと共に 中ちゆうじき 食ととのを準  
 えたいと言出すと、毎日のぞめき歩あるきに至極案内知つたる柳下亭種た  
 員ねかず心得たりという見得みえで、雪駄せったの爪つまさき先に煙管をぼんとはたき、  
 「では先生、早速あの突当りの菜飯茶屋なめしぢややなどはいかがで御座いま

しよう。さんとうおう 山東翁が『きんせいきせきこう 近世奇跡考』に書きましたきんりゆうざん 金竜山らちや 奈良茶の昔はいかがか存じませんが、近頃は奥山の奈良茶もなかなかこつたものを食わせやす。それに先生御案内でも御座いましうが、お座敷から向う一面に裏うらたんぼ 田圃を見晴す景色はまた格別で御座いますよ。丁度今頃は田圃はすに蓮の花が咲いておりましよう。」

八

一同は早速水茶屋の床几をはなれ、ここにもおい 生茂る老樹のかけに風流な柴垣を結ゆいめぐ 廻らした菜飯茶屋の柴折門しおりもんをくぐつた。なるほど門人種員の話した通り打水うちみず 清き飛石とびいし づたい、日よを避け

する夕顔棚からは大きな糸瓜へちまの三つ四つもぶら下っている中庭を隔  
 てて、茶がかった離れの小座敷へと通るや否や明放した濡縁ぬれえんの  
 障子から一目に見渡した裏田圃の景色。これは全く格別の趣きで  
 ある。これは即ち南なんしゅう宗ほくしゅう北とさすみよし宗しじょうより土佐住吉まるやま四条円山  
 の諸派にも顧みられず僅わずかに下品極まる町絵師が版下絵はんしたえの材料に  
 しかなり得なかつた特種とくしゅの景色である。狂歌川せんりゅう柳の俗氣を  
 愛する放蕩ほうとう背倫の遊民にのみいうべからざる興趣を催させる特  
 種の景色である。即ち左手には田町たまちあたりに立続く編笠茶屋あみがさぢやと  
 おほい覚しい低い人家の屋根を限りとし、右手は遙はるかに金杉かなすぎから谷中飛やなかあ  
すかやま鳥山の方へとつづく深い木立を境にして、目の届くかぎり浅草  
 の裏田圃は一面に稲葉の海を漲みなぎらしている。その正面に当つてあ

たかも大きな船の浮ぶがように吉原よしわらの廓くるわはいずれも用水桶を載せ頂いた鱗こけらぶき 葺そびやかの屋根を聳そびやかしているのであつた。

薄く曇つた初秋の空から落る柔かな光線ひかげは快く延切のびきつた稲の葉

の青さをば照輝く夏の日よりもかえつて一段濃くさせたように思

われた。彼方かなた此方こなたに浮んだ蓮田はすだの蓮の花は青田アヲの天鷲ビロウド絨じゆうに紅白の

刺ぬいとり繡うちそよをなし打戦うちそよぐ稲葉の風につれて得えもいわれぬ香気を送つ

て来る。鳴子なるこや案山子かかしの立つている辺あたりから折々ぱつと小鳥の飛立

つごとに、稲葉うづもに埋れた畦道あぜみちから駕籠かごを急ゆききがす往来の人の姿が

現れて来る。それは田圃たのの近道ちかみちをば田面たのもの風と蓮の花の薰りかえりとに

見残した昨夜ゆうべの夢を託たくしつつ曲輪くるわからの帰途かえりを急ぐ人たちである

う。

種彦は眺めあかすこの景色と、久ぶりに取上げる杯の味と、埒  
 もない門弟たちの雑談とに、そぞろ今日の外出そとでの無益でなかつた  
 事を喜んだ。全く気に入つた景色、気に入つた酒、気に入つた雑  
 談。この三拍子が遺憾なく打揃うちそろうという事は人生容易に遇あいが  
 たい偶然の機を俟またねばならぬ。偶然の好機は紀文奈良茂の富を  
 以てしてもあながちに買かい得るものとは限られぬ。女中が持運ぶ  
 蜺しじみ汁じゆと夜蒔よまきの胡瓜きゆうりの酸すの物秋茄子あきなすのしぎ焼やきなどを肴さかなにして、  
 種彦はこの年としつき月東都一流の戯げ作者さくしやとして凡およそ人の羨うらやむ場所に  
 は飽果あきはてるほど出入でいりした身でありながら、考かんえて見れば雨や風の  
 さわりなく主客共よに能く一日半夜の歡かん会かいに逢あい得たる事いくば  
 くぞと、さまざまなる物見遊山ゆさんの懐旧談わくじゆたんに時の移るのをも忘れて

いたが、折から一同は中庭を隔てた向うの小座敷に先ほどから頻  
と手を鳴らしていたお客が遂に亭主らしい男を呼付けて物荒くい  
のし  
い罵り初めた声を聞付けた。客は詭あつらえた酒さけさかな肴あまのあまりに遅い  
事を憤り、亭主はそれをぼひたあやまりに謝罪あやまっていると覺しい。  
そう心付いて見れば一同の座敷も同じ事、先ほど詭あつらえた初はつたけ茸けの  
吸物もまたは銚ちようし子の代りさえ更に持つて来ない始末である。別  
に大勢の客が一度に立たてこ込んで手が足りぬというのでもないらしい。  
どうした事かと仙果は二、三度続けざまに烈はげしく手を鳴らしたが、  
すると、以前の女中が銚子ちようしだけを持つて来ながら息使いも急せわしく  
いた甚うろたくも狼狽うろたえた様子で、

「どうも申訳ごしやいが御在ごません。どうぞ御勘弁を……。」とばかり前



髪から滑り落ちる簪もそのままにひたすら額を畳へ摺付けていた。

「こう、姐さん。どうしたもんだな。そうむやみやたらに謝罪られても始まらねえ。お爛はつけずお肴はなしというのじゃ、どうもこれアお話にならないじゃねえか。」

「唯今帳場からお詫に出ると申しております。どうぞ御勘弁をなすつて下さりませ。」

「それじゃ姐さん、酒も肴も出来ねえといいなさるんだね。」

「出来ない何のと申す訳では御座いせんが、旦那。実は大変な事になりましたので御座います。今が今とて、定巡の旦那衆がお出でになりました、その方どもでは時節ちがいの走物を料理に使つてはいないかと仰有りました、洗場から帳場の隅

々までお改めになつてお歸りになるかと思えば、今度は入違いれちがひにでんぼういん伝法院の御役僧と町方まちかたの御役人衆とがお出いでになり、お茶屋へ奉公する女中たちはこれから三月中みつぎうちに奉公をやめて親元へ戻らなければかくしばいじよ隠売女とかいう事にいたして、吉原よしわらへ追遣おいやつてお女郎じよろうにしてしまうからと、それはそれは厳しいお触ふれで御座います。」

種彦初め一同は一時に酒の酔を醒さましてしまった。女中はもう涙をほろほろ滾こぼしながら相手選ばず事情を訴えようとす。

「お上かみの旦那衆もあんまりお慈悲がなさすぎるでは御座いませんか。こうして手前ども供がお茶屋へ奉公いたしておりますのをどうやら好きこのんで猥みだらな事でもいたすように仰有いますが、まあお

聞きなすつて下さいまし。こうして私がお茶屋奉公でもいたさなければ、ははおや母親や亭主が日干しになつてしまうので御座います。

亭主は足腰が立ちませんし母親は眼が不自由な因果な身の上で御座ります……。」

先ほど手を鳴らし立てた元氣は何処へやら、一同は左右から女中をいい慰め一刻も早くこの場を立去るより仕様がなない。わずかにその場の空腹をいやすためもう誂えべき料理とてもない処から一同はこうのもの香物に茶漬をかき込み、過分の祝儀しゅうぎを置いてほうほうの体ていで菜飯茶屋なめしぢやの門かどを出たのである。

「種員さん、いよいよ薄気味の好よくねえ世の中になつて来たぜ。

岡場所に残らずお取払い、お茶屋の姐さんは吉原へ追放、女髪かみゆ

結いに女芸人はお召捕り……こうなつて来ちやどうしてもこの次は役者に戯げ作者さくしやという順じゆんどり取だ。」

「こうこう仙果さん。大きな声をしなさんな。その辺はに八丁はつちようぼ堀りの手先が徘徊うろついていねえとも限らねえ……。」

「鶴つる亀かめ々々つるかめつるかめ。しかし二本差した先生のお供をしていりやア与よ力りきでも同どうしん心しんでも滅多めったな事はできやしめえ。」と口にはいったけれど仙果は全く気味悪そうに四辺あたりを見廻さずにはいられなかつた。それなり種彦を初め一同は黙然もくねんとして一語をも発せず、訳もなく物に追わるるるように雷門の方へ急いで歩いた。

久しぶりの散歩に思の外の<sup>ほか</sup>疲労<sup>つかれ</sup>をおぼえ、種彦はわが家に帰るが否や風通しのいい二階の窓際に<sup>ひじまくら</sup> 肱<sup>ひじまくら</sup> 枕<sup>まくら</sup>してなおさまさまに今日の騒ぎを<sup>うわさ</sup>噂する門人たちの話を聞いていたが、する中<sup>うち</sup>にいつか知らうとうとと坐<sup>まどろ</sup>睡<sup>まどろ</sup>んでしまった。

疲れ果てた<sup>げさくしや</sup>戯作者<sup>げさくしや</sup>の魂は怪し気なる夢の世界へとさまよい出したのである。

最初に門人らの話声が近くなり遠くなりして、いかにも<sup>ものう</sup>懶<sup>ものう</sup>くまた心地よく耳許に残っていたが、いつか知ら風の消ゆるが如<sup>うしお</sup>く潮<sup>うしお</sup>の退<sup>ひ</sup>く如くに聞えなくなつてしまつたと、戯作者の魂は<sup>たちま</sup>忽<sup>たちま</sup>ちいずこからとも知れず響いて来る<sup>かすか</sup>幽<sup>かすか</sup>な<sup>かなぼう</sup>金<sup>かなぼう</sup>棒<sup>ぼう</sup>の音を聞付けた。今<sup>いまじぶん</sup>時<sup>いまじぶん</sup>分<sup>ぶん</sup>

不思議な事と怪しむ間もなく、かの金棒の響は正しく江戸町々の  
 名主が町奉行所からの御達を家ごとに触れ歩くものと覺しく、  
 彼方からも此方からも互に相呼応しつつさながら嵐の如くに湧  
 起つて来るのである。それと共に突然川水の流るる音が訳もな  
 く高まり出した。種彦は屋根船の中に揺られながら眠っているよ  
 うな心持もすれば、また高い青楼の二階の深い積夜具の中にふ  
 うわりと埋まつているような心地もする。とにかく驚いて顔を上  
 げると、自分の身体のある処よりも遙に低く、雨気を帯びた雲の  
 間をば一輪の朧月が矢の如くに走っているのを見た。町の木  
 戸が嚴重に閉されていて番太郎の半鐘が叩く人もいないの  
 に独で勝手に鳴響いている。種彦は唯ただ不審の思をなすばかり。

通過ぎる人でもあらば聞質ききただしたいと消えかかる辻番所つじばんしよの燈火あかり  
 をたよりに、頻しきりと四辺あたりを見廻すけれど、犬の声ばかりして人影と  
 ては更さらにない。何となく胸騒ぎがして何処へという当もなく一生  
 懸命かけだに駈出し初めると、忽ち目の前に大きな橋が現われた。種彦  
 は足にまかせて瞬時たもとも早く橋を渡り過ぎようとする、突然後うしろか  
 ら両方の袂たもとをしつかりと押えて引止めるものがある。何者かと思  
 つて振返ると、心中でも仕損じた駈落者かけおちものとおぼしく、橋際はしぎわへ  
さらしもの晒者さらしものになつてゐる二人の男女があつて、その両手は堅く縛いましめ  
 られている処から一心に種彦の袂をば齒くわで啣くわえていたのであつた。  
 あまりの気味悪さに覚えぬくてず腰なる一刀を拔手ぬくても見せずまに切放すと  
 二つの首は脆もろくも空中に舞飛んで鞠まりの如くにころころと種彦の足

許ころげおに転落おちる。その拍子おにふと見れば、こはそも如何いかに男まは間ま違がう方かたなく若旦那りゆうじよ柳絮じよ、女はわが家に隠匿かくまつたお園そのではないか。しまつた事をした。情ない事をした。許してくれと、種彦は地に跪ひざまずいて落ちたる二つの首級くわを交かわるがわる々々に抱上げ活いける人に物ものいう如く詫わびていると、何時いつの間まにやら、お園と思つたその首は幾年か昔おの己おのれが西丸にしのまるのお小姓おのを勤めていた時、不義の密通をした奥女中おくにやうなにかしの顔となり、また柳絮と思つたその首は幾年の昔さかいちよう堺町さかいちようの楽屋新道がくやじんみちあたり辺かいなじで買馴染かひなじんだ男娼かげまとなつていた。再びびつ悔ひりして二つの首級くわをハタと投出し唯茫然ぼうぜんとしてその場に佇た立たずずでしまうと、いつの間に寄集まつて来たものか、菰こもを抱かえた夜鷹よたかの群むれが雲霞うんかの如ごとくに身のまわりを取巻かいていて一斉いっせいに手を拍う



つて大声に笑い罵ののるのである。しかも種彦の眼には数知れぬ夜鷹の顔がどうやら皆一度はどこかで見覚えのある女のように思われた。恐ろしいやら気味悪いやら、種彦は狂気の如く前後左右に切きり退け切払い、やつとの事で橋の向うへと逃げのびたが、もう呼吸いきも絶え絶えになるばかり疲れ果て有合あう捨すて石いしの上に倒るるやうに腰を落した。

幸い四辺あたりは静で、もう此処ここまでは追掛けて来るものもないらしい。朧月の光が軟やわらかに夜の流ながれを照している。種彦は初めてほっと吐息もらを漏し、息切れのする苦しさに石垣の下なる杭くいにつかまり身を這はわせるようにして掌てのひらに夜の流ながれを掬くみ上げようとすると、偶然にも木の葉こはのように漂つて来る一箇ひとつの杯さかずき。今の世なんびとに何人の戯れぞ。

紀文が杯流しの昔も忍ばるる床しさと思ふ間もなく、早や二、三艘の屋根船が音もなく流れて来て石垣の下なる乱杭に繋がれているではないか。閉切つた障子の中には更に人の氣勢もないらしいのに唯だ朗かに河東節「水調子」の一曲が奏られている。種彦は先ほどの恐ろしい光景をも全く忘れてしまい今は何という訳もなく二十歳の若い姿を朧夜の河岸に忍ばせて、ここに尋ね寄る恋人を待構えるような心持になっていた。

果せるかな。忽然川岸づたいに駈け来る一人の女がハタとわが足許に躓いて倒れる。抱き起しながら見遣れば金銀の繡取ある襦袢を着横兵庫に結つた黒髪をば鼈甲の櫛笄に飾つく尽した傾城である。いかなる訳あつて夜道を一人何処へとい

たわりながら聞く間もおそし、後から飛んで来る追手の二、三人、物をもいわず褌襠を剥取つてずたずたに引裂き鼈甲の櫛笄や珊瑚の簪をば惜気もなく粉微塵に踏碎いた後、女を川の中へ投込んだなり、いかにも忙しそうに川岸をどンドン駈けて行く。種彦はあまりの事に少時はその方を見送つたなり、呆然として佇立んでいたが、すると今までは人のいる氣勢もなかつた屋根船の障子が音もなく開いて、

「先生。柳亭先生。お久ぶりで御座ります。」と親し気に呼びかける男の声。見れば濃い眉を青々と剃り眼の大きい口尻の凜々しい面長の美男子が、片手には大きな螺旋の煙管を持ち荒い三升格子の襦袢を着て屋根船の中に胡坐をかいていると、その周

囿わりには御殿女中と町娘と芸者らしい姿した女がいずれ劣らずこの男に魂までも打込んでいるといふ風にしなだれ掛つていた。種彦驚き、

「これはお珍しい。貴公は木場のきば白猿子はくえんしでは御座らぬか。」

「いかにも七代目海老蔵しちだいめいめえびざうに御座います。久しくお目にかかりませぬが先生には相変わらず御壮健きようえつ悦しやく至極しごくに存じます。」

「いや、拙者おちうどなぞもこの時節そばだがらいつどのような御咎おとがめを蒙こうむる事

やら落人おちうど同様風の音にも耳そばだを敬そばだてています。それやこれやでその後そはついぞお尋ねもせなんだがこの間はまたとんだ御災難おちうどと

うとうお江戸構いとやら聞きましたかと思掛けない今時分こどうしてこ此処へはお出でなすつた。」

「その不審は御尤も。実は今日まで先祖の菩提所なる下総の在所ざいしよに隠れておりましたが是非にも先生にお目にかかり、折入なかがわつてお願い致したい事が御座りまして、夜中やちゆうそつと中川の御番所ごばんしよをくぐり抜けわざわざ爰こゝまでやつて参りました。」

「はて拙者のようなものに折入せいつてお頼みとは。」

「外ほかの事でも御座りませぬ。あれなる二艘そうの屋根船つみのに積載せまし

た金銀珠玉の事で御座ります。実は当年四月木挽町こびきちようの舞台にて

家の狂言「景清」牢破ろうやぶりの場を相勤めおりまする節突然御用

の身あひと相なり、遂に六月二十二日北御番所のお白洲しろすにて役者海老

蔵事こと身分わきまを弁えず奢侈しやしせんじよう僭上おもむきとどきしごくの趣不届おとせ至極とあつて、家財家

宝とりこわしお取壊の上江戸十里四方御追放仰おおせつけ付つけられましたがい

ずれはかよ<sup>おとがめ</sup>うの御咎もあろうかと木場<sup>きば</sup>の住居<sup>すまい</sup>お取壊に相ならぬ  
 中<sup>うち</sup>、弟子どもが皆それぞれに押隠しました家の宝、それをば取集  
 め、あれなる船に積載せて参つた次第で御座ります。先生へ折入  
 つてお願<sup>も申し</sup>と申まするは何<sup>なに</sup>とぞあれなる宝をばいかようにも致し、  
 後の世まで残しお伝え下さるよう御計らいなされては下さるまい  
 か。諸<sup>しよぎよう</sup>行無常は浮世のならい某<sup>それがし</sup>の身の老朽<sup>おいく</sup>ち行くは、さらさ  
 ら口惜<sup>くちお</sup>しいとも存じませぬが、わが国は勿<sup>もちろん</sup>論唐天竺<sup>からてんじく</sup>和蘭陀<sup>オランダ</sup>に  
 おきまして、滅多<sup>めった</sup>に二つとは見られぬ珊瑚<sup>たいまい</sup>玳瑁<sup>たいまい</sup>ぎやまん<sup>たぐい</sup>の類、  
 または古人<sup>いつせいいちだい</sup>が一世一代の名作といわれた細工物はいかにお上の  
 御趣意とは申ながらむぎむぎと取壊されるがいかにも無念で相な  
 りませぬ。人の生命<sup>いのち</sup>にはまた生れ替る来世とやらも御座いましよ

うが、金銀珠玉の細工物は一度壊されては再ふたたびこの世には出て参りませぬ。先生。海老蔵が折入つて御願いと申まするは斯かよう様の次第で御座ります。―

言う言葉と共に海老蔵を載せた屋根船はおのずと岸を離れ、見る見る狭霧さぎりの中に隠れて行く。種彦はまア暫しばらうく暫くと声を上げ、岸の上をば行きつ戻りつ、消え行く舟を呼び戻そうとしていると、  
 忽たちまち生なま暖あたかい風がさつと吹き下りて、振乱す幽霊の毛のよう  
 に打なびく柳の蔭かげからまたしても怪し気なる女の姿が幾いくたり人と知  
 れず彷徨さまよい出いで、何ともいえぬ物もの哀あわれな泣声を立て、糸のよう  
 に瘦やせた裸足はだしのまま頻しきりと地上に落ちた何物かを拾い上げては限り  
 もなくさめざめと泣き沈むありさま、何事の起つたのかと種彦は

ふと心付けばわが佇む地の<sup>たたず</sup>上は一面に踏<sup>ふみ</sup>碎<sup>くだ</sup>かれた水晶瑪瑙琥珀<sup>めのうこはく</sup>  
 鶏<sup>けい</sup>血<sup>けつ</sup>孔雀<sup>くわん</sup>石<sup>せき</sup>珊瑚<sup>さんご</sup>鼈<sup>べつ</sup>甲<sup>か</sup>ぎやまんびいどろなぞの破片<sup>かけら</sup>で埋<sup>うず</sup>め尽<sup>つく</sup>  
 されている。そして一足でも歩もうとすればこれらの打壊された  
 宝玉の破片は身も戦慄<sup>おのの</sup>かるるばかり悲惨<sup>ひびき</sup>な響<sup>ひびき</sup>を発し更に無数の破  
 片となつて飛散る。その度<sup>たび</sup>ごとに女の群<sup>むれ</sup>はさもさも恨めし氣に此<sup>こ</sup>  
 方<sup>なた</sup>を眺めては、身も世もあらぬように声を立てて泣くのである。  
 種彦も今は覚え<sup>な</sup>ず目がくらんでそのまま水中に転<sup>まろ</sup>び落ちてしまつ  
 た。彼方<sup>かなた</sup>に流<sup>か</sup>され此方<sup>こなた</sup>へ漂<sup>うち</sup>いする中に、いつか氣も心もつかれ果  
 て、遂<sup>もろ</sup>に脆<sup>まぶた</sup>くも瞼<sup>みみ</sup>を閉<sup>み</sup>じ水底<sup>みずそこ</sup>深く沈<sup>し</sup>んで行<sup>ゆ</sup>つた。かと思<sup>おも</sup>うとやが  
 て耳<sup>みみ</sup>許<sup>もと</sup>に聞<sup>き</sup>馴<sup>な</sup>れた声<sup>こゝろ</sup>がして、頻<sup>しきり</sup>と自分<sup>し</sup>を呼<sup>よ</sup>びながら身<sup>からだ</sup>体を揺<sup>ゆり</sup>う  
 動<sup>ご</sup>かすものがある。ふツと眼を開けば何事ぞ、埒<sup>らち</sup>もない一場<sup>いちじやう</sup>の



夢はここに尽きて老いたる妻がおのれを呼覚よびさましているのであつた。

なるほど水の中に沈んだと思つたのも無理はない。秋の夕陽ゆうひはてすり欄干の上にさし込んでいて、吹き通う風の冷さに蔽おほうものもなくうたたね転寐した身体中は気味悪いほど冷切ひえきつているのである。種彦は二度も三度もつづけざまにする嚏くさめと共にどうやら風邪かぜを引込んだような心持になつた。

## 十

家ごとに焚たく盃うらぼん蘭盆おくりびの送火ものさびに物淋たちそしい風の立初たちそめてより、

道行く人の下駄げたの音夜廻りの拍子木犬の遠吠とおぼえまた夜蕎麦売の呼よそぼうり  
 声にも俄にわかに物の哀れの誘われる折から、わけても今年ごはつとは御法度厳  
 しき浮世の秋、朝な夕なの肌寒さも一ひとしお入深く身に浸しむ七月ななかばの半  
 過ぎ。にせむらさきろう修紫楼しゆしの燈火ともしびは春よりも夏よりも徒いらざらにその光の澄  
 み渡る夜よもやや深ふけ初そめて来た頃であつた。主人あるじはいつぞや怪し  
 き昼寐ひるねの夢から引込んだ風邪の床とこに今宵こよいもまだ枕まくらについたまま、  
 相あいも変らずおのが戯作げさくのあれこれをば彼方かなたを一、二枚此方こなたを二、  
 三枚と読返よみかへしていた折から、突然あいじやくけん愛雀軒あいせきけんと題かした彼の風雅な  
 庭木戸たにきどを叩たたいたものがある。茶の間まの長火鉢ながひばちに妙振みょうふりだ出しを煎せん  
 じていた妻何心もなく取次とりだに出て見ると、堀田原ほったわらの町名主まちなぬしを  
 案内あんないにして仲間ちゆうげんに提灯ちようちん持たせた中年さむらいの侍こぶしんぐみくみ、小普請組こぶしんぐみくみ組

頭しらよりの使者と名乗つて一封の書状を渡して立去る。と間まもな  
 く横山町よこやまち辺の提灯をつけた辻駕籠つじかご一い挺つつ、飛ぶがように駈か  
 来けきたつて門口かどぐちに止るや否や、中から転まろび出いづる商人風あきうどふうの男、  
 「先生は御在宅でいらつしやいますか。鶴屋喜右衛門つるやきうえもんの手代てだいで御  
 座あいます。」と声もきれぎれに言うのであつた。手代あるじは主人の寝  
 所に通つて何やら密談ひそかに耽ふけつた後門外のちに待たせた辻駕籠に乗つて  
 再び何処いずこへか飛び去つてしまつたが、それからというもの修紫楼  
 の家の内にわかは俄ものけだに物氣立ものけだつて、咳嗽せきを交まじうる主人あるじの声と共にその妻  
 の彼方かなた此方こなたと立働たてわくらしい物音が夜の深ふけ渡るまでも止やまなかつ  
 た。

丁度その刻限、そんな騒ぎのあらうとは露知らぬが仏、門人の

柳下亭種員りゆうかていたねかずは新吉原しんよしわらの馴染なじみの許もとに泊とつていたのである。竹た
  
 格子けこうしの裏窓を明けると箕輪田圃みのわたんぼから続いて小塚原こづかつばらの灯あかりが見え
   
 る河岸店かしみせの二階にに、種員きゆうは昨日きのうの午過ひるすぎから長き日を短く暮す床とこ
  
 の内うち、引廻びようぶした屏風びやうぶのかげに明六ツあけむならぬ暮の鐘かね。敵娼あいかたの女に
  
 が店を張りにと下りて行くだつた隙すきを窺うかがい薄暗あんどろい行燈あんどうの火影ほかげに頻しきりと
   
 やたて矢立やたての筆を噛かみながら、折々は気味の悪い思出し笑わらいを漏もらしつつ
   
 一生懸命いっしょうけんめいに何やら妙な文章ぶんしょうを書きつづつていた。種員きゆうは草双紙くさごうし
  
 類ごはつと御法度ごはつとのこの頃ころいよいよ小遣錢こづかいにも窮きゆうしてしまつたため国貞門くにさだかど
  
 下したの或ある絵師えしと相談さうだんして、専ら御殿奉公ごてんほうこうの御女おじよ中衆ちゆうしゆうが貸本屋かきほんやの
   
 手てによつてのみ窃ひそかに購あがい求めるといふ秘密ひそかの文学ぶんがくの創作さくしゆを思おもひ立
   
 つたのであつた。

早や大引とおぼしく、夜廻よまわりの金棒かなぼうの音、降来る夕立のよ  
うに五丁町ごちようまちを通過ぎる頃、屏風の端はしをそつと片寄せた敵娼あいかたの  
華魁おいらん、

「主ぬしア、まだ起きていなんしたのかい。おや何を書いていなます。  
何処どこぞのお馴染なじみへ上げる文ふみでありんしよう。見せておくんなんし  
。」と立膝たてひざの長煙管ながぎせるに種員たねいんが大事の創作をば無造作に引寄せ  
ようとす。種員驚き、

「華魁、文じゃねえ、悪く気を廻しなさんな。疑るなら今読んで  
聞かせやしよう。だがの、華魁。あんまり身を入れて聞きなさる  
と、とんだ勤めの邪魔になりやす。」

こんな口説くぜつよろしくあつて、種員は思いも掛けぬ馬鹿に幸福しあわせ

な一夜を過しあくるあさ翌朝おおもんぼんやり大門を出たのであった。

土手八丁をぶらりぶらりと行ゆきつく尽して、山谷堀の彼方から

吹いて来る朝寒あさざむの川風に懐ふところ手したわが肌の移うつり香えに酔いな

がら山やましゆくの宿の方へと曲つたが、すると丁度その辺は去年の十月火

災かかに罹つた堺町さかいちようふきやちよう葺屋町の替地かえちになつた処とて、ここに新し

い芝居町しばいまちは早くも七分通普請を終えた有様である。中村座なかむらざ

と市村座いちむらざの櫓やぐらにはまだ足場がかかつていたけれど、その向側の

操人形座あやつりにんぎようざは結城座薩摩座ゆうきざさつまざの二軒ともに早やその木戸口に彩

色の絵具ささえ生々しい看板あたるはちがつと当八月より興業する旨の口上こうじよう

を掲げていた。されば表通り軒並の茶屋はいずれも普請を終つて

今が丁度移転ひっこしの最中さいちゆうと見える家うちもあつた。彼方かなた此方こなたに響く

鑿のみなづち金槌の音につれて新しい材木の脂やにの匂においが鋭く人の鼻をつく中  
 をば、引越の荷車は幾いくりよう輛となく三升や橘や銀みすす杏たちばなの葉いちようなどの  
 紋もんどころ所つづらをつけた葛籠つづらを運んで来る。あちこちと往来ゆききする下したまわ  
 廻りらしい役者の中にはまだ新しい御触おふれが出てから間まもない事と  
 て、市中と芝居町との区別を忘れて、後生大事かむに冠かむつたままの編あ  
 笠みがさを取らずに歩いているものもあつた。それが見馴みなれぬ目には  
 いかにも不思議に思われるのであつた。

種員まつちやまはつい去年の今頃までは待乳山まつちやまの樹きの茂りを向うに見て、  
 崩れかかった土塀きつねの中には昼間でも狐きつねが鳴いているといわれた小こ  
 出伊勢守いでいせのかみさま様の御下屋敷おしもやしきが、瞬またたく中に女形おやまの振袖ふりそでなびく綺羅音きら  
 楽ちまたの巷ちまたになつたのかと思うと、この辺の土地をばよく知っている

身には全く狐につままれたよりもなお更不思議な思がして、用も  
 ないのに小路こうじ々々の果までを飽きずに見歩いた後、やがて浅草あさくさ  
 随身ずいじん門外の裏長屋のんきに呑気ひとりじよたいな独世帯ひとりじよたいを張っている笠亭りゅうてい仙  
 果かの家うちへとやって来た。仙果は何処へか慌忙あわてて出て行こうと  
 する出合であい頭がしら朝帰りの種員を見るや否や、いきなりその胸倉を取  
 って、「乃公おらア今いまお前めえを捜さがしに行こうと思つていた処だ。気をた  
 しかにしな。気をたしかにしな。」  
 「こう仙果さん。どうしたもんだな。お前めえこそ気でもちがったん  
 じゃねえか。痛いたえ痛え。まア放してくんな。懐ふところ中から大事な書  
 きものがおつこちるぜ。」

「気をたしかにしなせえ。腰でも抜かさぬように用心したがいい



ぞ。堀田原ほったわらの師匠がの、今朝おなくなりになつたのだ。」

啞然あぜんとしていう処を知らぬ種員に向つて仙果は泣く泣く一伍いちぶし

一什じゅうを語り聞かせた。

柳亭種彦先生は昨夜の晩おそく突然北御町奉行所よりお調しらべの筋

があるにより今朝五ツ時どきまでにとおりあぶらちようじほんどんやつるやきうえ通油町地本問屋鶴屋喜右衛

門同道もんどうにて常磐橋ときわばしの御白洲おしらすへ罷出まかりでよとの御達おつたしを受けた。それ

がためか、あらぬか、先生は今朝方御病中の髪けさがたを結直ゆいなおしておら

れる時突然卒中症はやうちかたに襲われ、

散るものに極きわまる秋の柳かな

という辞世の一句も哀れや六十一歳いちじを一期いちごとして溘然こうぜんこの世を

去られた。

種員は頬冠ほおかむりにした手拭てぬぐいのある事さえ打忘れ今は惜氣おしげもなく  
大事な秘密出版の草稿に流るる涙を押し拭ぬぐった。そして仙果諸もろとも共  
堀田原をさして金竜山きんりゅうざんの境内を飛ぶがごとくに走り行く。

大正元年初冬稿

## 青空文庫情報

底本：「雨瀟瀟・雪解 他七篇」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年10月16日第1刷発行

1991（平成3）年8月5日第6刷発行

底本の親本：「荷風小説 四」岩波書店

1986（昭和61）年8月8日

初出：「三田文学」

1913（大正2）年1月、3月、4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「散柳窓夕栄《ちるやなぎまどのゆうばえ》」  
となっております。

※初出時の表題は「戯作者の死」です。

入力：入江幹夫

校正：酒井裕二

2018年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 栄夕窓柳散

永井荷風

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>